

名古屋市立大学 SDGs活動レポート (2020年度版)

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



Goal 1

1 貧困を
なくそう



2020年度 国連食糧農業機関（FAO）へのインターンシップ生の派遣



活動の概要	<p>国連食糧農業機関（FAO、本部イタリア・ローマ）は世界の農林水産業の発展と農村開発に取り組む国連の専門機関です。1945年に設立され、196の加盟国（2つの準加盟国含む）およびEU（欧州連合）から成り、食糧安全保障や飢餓撲滅運動等の持続的開発目標（SDGs）の達成を目指しています。本学は2010年にFAOとインターンシップ派遣に関する協定を締結し、2011年度より同機関の水産局にインターン生派遣を開始しました。2018年度より、同機関のインターンシッププログラム見直しにより、インターンの派遣先が全世界のオフィスに拡大されました。</p> <p>2020年度は、学生1名がFAOフィリピン事務所による約3か月間のオンラインインターンシップに参加しました。</p>
活動の時期	<p>2011年度よりインターン生の派遣開始 2018年度よりインターンシッププログラム見直し 2020年度：派遣実績1名</p>
関連URL	<p>国連食糧農業機関(FAO)インターンシップ</p>

概要

SDGs

学部学科

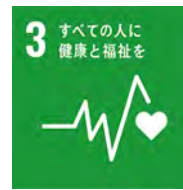
研究科コース

入試

ホーム > SDGs活動紹介 > ようこそ大学へ!プロジェクト—施設等の子どもたちへの学習支援

SDGs活動紹介

ようこそ大学へ!プロジェクト—施設等の子どもたちへの学習支援



担当者	谷口由希子:人間文化研究科(心理教育学科)、准教授、(専門分野)社会福祉学
-----	---------------------------------------

本プロジェクトは、名古屋市内の児童養護施設などで生活する子どもへの学習支援と進学への動機づけを促すことを目的とするもので、2020年で8回目の開催を迎えます。2013年度から名古屋市の依頼を受け、名古屋市立大学人文社会学部を中心に実施する共同企画です。

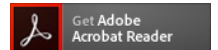
参加する子どもたちは、名古屋市内の児童養護施設や母子生活支援施設で暮らす小中学生約60人です。学生ボランティア(約50名)とともにプログラムを実施します。毎年、名古屋市立大学学長をはじめ、人文社会学部の多くの教職員が参加し、名古屋市からは副市長はじめ、子ども青少年局長、職員も参加します。

当日は、子どもたちと大学生がペアになり、子どもたちは「1日名市大生」になります。午前中は夏休みの宿題を一緒に行い、お昼は学生食堂で一緒にお昼ご飯を食べます。午後のプログラムは、1研究室訪問/教授カフェ(子どもたちがグループごとに研究室を訪問し教員に質問をします)2心理学実験(心理学の実験を体験します)、3大学探検(図書館や大学内の古墳等を学生が案内します)、その他、ダンス、アカベラ、学生講師によるクラフト企画等を提供し、学生生活を体験します。

※児童養護施設とは、なんらかの事情で保護者とともに暮らすことのできない子どもたちが生活している場であり、全国に約600ヶ所、約2万7千人(名古屋市は13ヶ所、約600人)の子どもたちがいます。

[ようこそ大学へ!プロジェクト \(PDF ファイル 0.28MB\)](#)

PDFファイルをご覧になるためには、[AdobeReader®](#) が必要です。パソコンにインストールされていない方は右のアイコンをクリックしてダウンロードしてください。



関連記事一覧

自死遺族に対する偏見とその低減に関する研究



担当者

山中亮:人間文化研究科(心理教育学科)、教授、(専門分野)臨床心理学

2006年に公布された自殺対策基本法の第一条には、「...自殺対策を総合的に推進して、自殺の防止を図り、あわせて自殺者の親族等の支援の充実を図り、もって国民が健康で生きがいをもって暮らすことのできる社会の実現に寄与することを目的とする」とされています。なぜあえて、自死遺族の支援の充実を図るということが強調されているのでしょうか?これは、そもそも自死遺族が社会的な圧力を受けやすい状況にあるという前提があると考えられます。こうした圧力を受けることによって自死遺族は大切な家族を失った苦痛だけでなく、社会的にも経済的にも、そして心理的にも困難を感じやすくなるのではないかと考えられます。

しかし元来日本は自殺に寛容な国だという指摘もあります。もしそうならば、自死遺族に対しても寛容であり、周囲の人々は遺族に対して偏見を向けたり、非難したりということはないかもしれません。果たして本当にそうでしょうか?こうした疑問を持って、心理学の視点から大学生を対象にいくつかの実証研究を行いました。その結果、他の死因(がんなど)で家族を亡くした遺族に比べて、自死遺族をより精神的に混乱し、死に対して責任を負っている人であるとみなし、接触する際には緊張を感じたり、好意を持てなかったり、共感しづらい対象であるとみなしていることが示されました。

こうした結果からも、日本においても自殺及び自死遺族への偏見が存在しており、自死遺族が生きづらい社会になっていることが推測できます。

今後はこうした偏見解消に向けた効果的な心理教育プログラムの開発などを行っていきたいと考えています。

[関連記事一覧](#)

SDGs活動紹介

名古屋市子どもに関する総合計画への提案と行政職員との意見交換



担当者	谷口由希子:人間文化研究科(心理教育学科)、准教授、(専門分野)社会福祉学
-----	---------------------------------------

本企画は、名古屋市立大学の学生が、名古屋市の子どもの取り巻く課題について、フィールドワークを通して学び、課題と解決策について考察した結果を発表し、名古屋市子ども青少年局長はじめ、行政職員の方と意見交換を行ったものです。

発表を行った学生11名は、フィールドワークに行く前の事前学習として「なごや子ども・子育てわくわくプラン2015—名古屋市子どもに関する総合計画—」を学び、地域の課題について考察しました。その結果、フィールドワーク先として、1ひとり親家庭・生活困窮世帯の子どもたちへの学習支援事業、2ひとり親家庭の子どもの居場所づくり事業、3母子生活支援施設、4ひとり親家庭の文化スポーツ交流事業を選定しました。学生は、グループに分かれ、複数回にわたり事業実施先の見学を行い、子どもの支援に関わる実務家からお話を伺いました。これらの学びをもとに学生が議論を重ねた結果を名古屋市に発表することは、学生の社会参画の一環としても期待されます。

<提案のポイント>

- 1居場所事業に子ども食堂の機能を加える:手作りご飯の提供、地域巡回バスを利用した送迎の工夫
- 2学習支援事業の対象を小学生まで広げる
- 3ひとり親家庭の支援コミュニティを作る:ひとり親家庭と支援をしたい人のマッチング、ホームステイ



名古屋市大生が子育て支援策 現場視察し市幹部らに提言

名古屋市が改定手続きを進めている「子どもに関する総合計画」に学生の目線や意見を反映してもらおうと、名古屋市立大の学生らが市役所を訪れ、フィールドワークを基に立案した子育て支援策を幹部職員らに提案した。

人文社会学部の谷口由希子准教授(社会福祉学)の授業を受講する一年生11人が3グループに分かれ、市の支援事業の現場を視察して提案をまとめた。

市が試験導入中で、一人親家庭の小学生を多分から夜まで預かって学習支援や軽食の提供をする「居場所づくり事業」には、市内に増やしてほしいと、食堂と連携を提案。定期的に親の食事会を開き、親子双方の悩みを聞ける態勢づくりの必要性を指摘した。

一人親家庭の中学生を対象にした学習支援事業については、対象を小学生まで引き下げたり、支援内容を学習だけでなくピアノや書道などの習いごとにも広げたりすることを提案した。

同計画は、なごや子ども条例に基づいて市が5年間で進める子どもや若者、子育て家庭への支援策の大方針がまとめであり、2015年度から新たな5年間の計画への改定が進んでいる。

学生から提案を聴き取った市子ども青少年局長の海野絵博局長は「計画の当事者世代である皆さんが現場を直接見て、感じ取った貴重な意見。ぜひ参考にさせていただきます」と話した。(谷口)



Goal 2

2 飢餓を
ゼロに



2020年度 国連食糧農業機関（FAO）へのインターンシップ生の派遣



活動の概要	<p>国連食糧農業機関（FAO、本部イタリア・ローマ）は世界の農林水産業の発展と農村開発に取り組む国連の専門機関です。1945年に設立され、196の加盟国（2つの準加盟国含む）およびEU（欧州連合）から成り、食糧安全保障や飢餓撲滅運動等の持続的開発目標（SDGs）の達成を目指しています。本学は2010年にFAOとインターンシップ派遣に関する協定を締結し、2011年度より同機関の水産局にインターン生派遣を開始しました。2018年度より、同機関のインターンシッププログラム見直しにより、インターンの派遣先が全世界のオフィスに拡大されました。</p> <p>2020年度は、学生1名がFAOフィリピン事務所による約3か月間のオンラインインターンシップに参加しました。</p>
活動の時期	<p>2011年度よりインターン生の派遣開始 2018年度よりインターンシッププログラム見直し 2020年度：派遣実績1名</p>
関連URL	<p>国連食糧農業機関(FAO)インターンシップ</p>

生活困窮を背景に非行をした青少年の修学支援プロジェクト



担当者

高橋康史:人間文化研究科(現代社会学科)、講師、(専門分野)社会福祉学・社会病理学

これまでの非行に関する研究や非行臨床では、学校の先輩から「悪さ」を教えてもらうなど非行の文化を学習することを前提として、非行をした青少年の「立ち直り」のあり方が模索されてきました。一方で、近年では非行に先行して、貧困の問題を背景とした社会からの排除(地域や学校、家庭での居場所がないこと)を経験している場合が少なくありません。その結果、社会的排除を経験している非行をした青少年は、人生や自分自身に未来に「諦め」をもたざるを得ません。

このプロジェクトでは、特定非営利活動法人くらし応援ネットワークとの連携のもと、次のような2つの内容を主軸とし、非行をした青少年への修学支援を行っています。

1. 青少年へのインタビュー調査を行い、従来の「立ち直り」のあり方を問い直し、非行をした青少年の生き方を支える理論的基盤の検討(トヨタ財団による研究助成)
 2. ゼミに所属している学部生と非行をした青少年との交流
 3. (大学進学やその準備のための諸条件がそろった青少年を対象に)ゼミ生が青少年に大学についてのプレゼンテーションをし、選択肢の可能性の提供
- 公益財団法人トヨタ財団2019年研究助成の内容

[関連記事一覧](#)

Goal 3

3 すべての人に
健康と福祉を



2020年度 愛知県で生活する外国人の保健医療アクセスを考える活動



活動の概要	<p>「愛知県で生活する外国人の保健医療アクセスを考える」研究を教育や活動とリンクさせながら継続しています。</p> <p>研究成果は学術発表するとともに、名古屋国際センターとの共催によるオープンフォーラムの開催や、前年度の活動をまとめた報告書の発行を通して、関係者にフィードバックしています。</p> <p>また、フィリピンルーツの子どもたちのためのインフォーマルスクールでの健診と健康教育を毎年看護学部生とともに実施しています。</p>
活動の時期	<p>【フォーラム開催】2021年2月27日</p> <p>【フィリピン子ども学校での健診】2021年2月12日</p>
関連URL	<p>名古屋市立大学看護学研究科国際保健看護学WEBサイト</p> <p>調査結果パンフレット（2021年4月）</p>
researchmap URL	<p>https://researchmap.jp/read0145307</p>
関連する論文	<p>- Asako Yoshino, Reginald B Salonga, Michiyo Higuchi. Associations between social support and access to healthcare among Filipino women living in Japan. Nagoya J Med Sci. 2021; 83; 551-565.</p> <p>- Michiyo Higuchi, Maki Endo, Asako Yoshino. Factors associated with access to health care among foreign residents living in Aichi Prefecture, Japan: secondary data analysis. Int J Equity Health. 2021; 20(1): 135.</p> <p>- 服部舞, 西村知亜紀, 樋口倫代. 愛知県54市町村の公式ウェブサイトによる外国人住民向け医療情報の提供状況. 国際保健医療. 2019; 34; 185-194.</p>
期待される効果、今後の展望	<p>NGO、フィリピン人、ベトナム人のコミュニティ、日本語学校、行政などにご協力いただき、さまざまな角度から外国人の保健医療へのアクセスの状況や関連要因を探り、学生や仕事をしていない人がリスクグループであること、ソーシャル・サポートが関連要因であることなどがわかってきました。</p> <p>対象地域を拡大し、サポートになる情報はどのようなものかを調べる研究に発展させています。また、健診・健康教育の開催場所を増やしていく予定です。</p>
所属	看護学研究科
氏名	樋口 倫代
専門分野	公衆衛生



国際子ども学校での健康教育（食べ物分類ゲーム）

2020年度 環境に関連した地域社会等との連携



<p>活動の概要</p>	<p>【環境に関連したテーマの講座等の開催】</p> <p>名古屋市科学館との連携により、中高生向けに、サイエンスパートナーシップイベント「物質科学と生命科学のリテラシー」を開催し、物質科学と生命科学の魅力を紹介しました。</p> <p>Zoom によるオンライン配信で、サイエンスカフェ in 名古屋 第 154 回「スコープで探る未知の世界～波打ち際に爆発的に進化したハゼたち～」を開催し、高校・中学校の生徒13名・教員2名を対象にハゼ類の生態を通して、環境保全の課題に関する講演を行いました。</p> <p>また、名古屋市環境局なごや生物多様性センターと共同で「なごや生物多様性シンポジウム～みんながつなぐ生物多様性の未来～」を開催し、理学研究科附属生物多様性研究センターからの研究報告を行ったほか、専門家と県下 8 高校の高校生とのトークセッションなどを通じて、生物多様性の普及啓発を行いました。</p> <p>【市民と共に生物調査を行うイベントの開催】</p> <p>市民とともに名古屋市内の全区で生物調査を行うイベント「なごや生きもの一斉調査 2020 バッタ編」（2020年10月2日～4日）で、理学研究科生物多様性研究センターのスタッフ 2 名が調査の地点リーダーを務めるとともに、理学研究科・総合生命理学部の学生 3 名が一般調査員として参加しました。</p> <p>【名古屋市スポーツ市民局の消費者啓発事業との連携協力】</p> <p>名古屋市スポーツ市民局の消費者啓発事業に、人文社会学部の学生がゼミ活動として連携協力し、その一環で2021年1月 18 日～3月 31 日までオンラインで開催された「名古屋市消費生活フェア☆2020 オンライン展示会」でパネル展示を行いました。</p> <p>プラスチックにかわる素材としてセルロースを使ったマスクと食品保存用ラップの提案や、使い捨てプラスチック容器を回収する方法としてのデポジット制に関するパンフレット制作や社会実験の成果をパネルで発表しました。</p>
<p>活動の時期</p>	<p>2020年度実績</p>
<p>関連URL</p>	<p>環境報告書2020</p>

2020年度 環境問題への理解を深める教育の推進

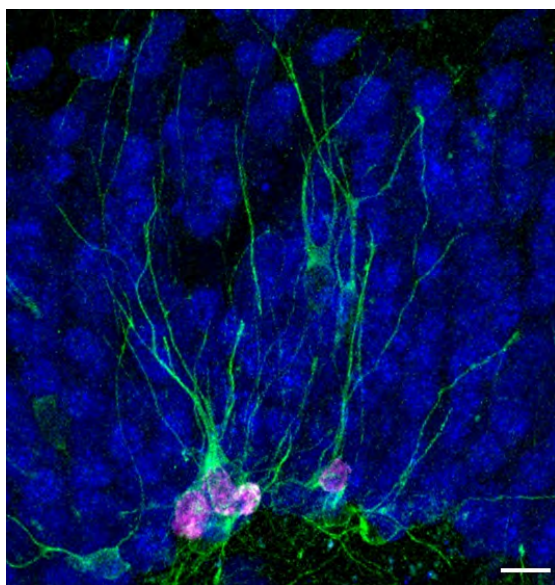


活動の概要	<p>本学では、教養教育及び専門教育科目において、環境問題及びその周辺の諸課題を認識し、自ら解決方法を考えさせることを目標とした科目を開講しています。</p> <p>また、全学共通の教養教育科目においては、全学部生が履修できるよう、教養教育の環境関連の科目15科目を開講し、環境問題への理解と関心を深めるようにしています。</p> <p>学部専門教育科目において、授業科目「ESD 概論」では、気候変動や生物多様性の損失をはじめとする環境問題が、自らの生活と密接に結びついていることに気づき、どうしたら持続可能な地球環境の保全に取り組めるのかを身近な地域課題を取りあげながら検討し、実行しています。</p> <p>さらに、大学院教育においても、環境問題について様々な学問的手法による分析、現地調査などによる研究を取り入れた授業科目が提供されています。「建築設備設計特論」では、日本を含む世界のエネルギー消費事情と政策動向を概観し、地球環境と建築とのかかわりを知ることで、未来を担う一人ひとりがその責務を認知し行動に移すことを目指しており、この授業を通して、建築設計のなかで実現できる省エネ・環境負荷手法について理解でき、建築設計者として取り組める環境配慮策を身につけます。</p>
活動の時期	2020年度
関連URL	環境報告書2020

コモンマーモセット成体海馬ニューロン新生に関する 新しい論文の掲載



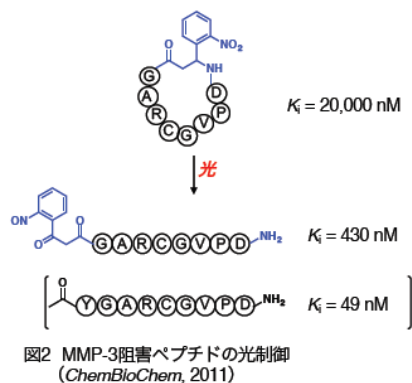
活動の概要	慢性ウイルス性肝炎および悪性腫瘍の治療に使用される炎症性サイトカインであるインターフェロンアルファ（IFNα）は、患者に鬱病症状を引き起こすことがあります。我々は過去に、IFNα治療がマウスの海馬神経新生を減少させることを示しました。今回の研究では、コモンマーモセットを用いて、4週間のIFNα治療の結果を調査し、IFNα治療がコモンマーモセットの行動変化と海馬における神経新生の減少を引き起こすことを示唆しました。
活動の時期	2020年6月27日（論文発表）
関連URL	コモンマーモセット成体海馬ニューロン新生に関する新しい論文の掲載
researchmap URL	https://researchmap.jp/read0094185
関連する論文	Kaneko N, Nakamura S, Sawamoto K. Effects of interferon-alpha on hippocampal neurogenesis and behavior in common marmosets. Mol Brain 13: 98 (2020) doi: 10.1186/s13041-020-00639-9, Micro report, Open Access, Published: 26 Jun 2020
期待される効果、今後の展望	霊長類におけるニューロン新生の特長について、今後さらに研究を進めることで、ヒトの脳疾患の病態解明や予防・治療開発に貢献する可能性があります。
所属	医学研究科 脳神経科学研究所 神経発達・再生医学分野
氏名	澤本 和延
専門分野	再生医学 神経科学



外部刺激に応答してペプチドを活性化させる新手法



活動の概要	我々は、環状一直鎖状の構造変換を利用し、ペプチド活性を制御する方法を開発しています。刺激応答性リンカーを介して環状化することで、光や酸化還元などの外部刺激に応答して活性化できます（図1）。環状とすることで、ペプチド創薬において課題となる生体内安定性向上・副作用低減も期待されます。リンカー由来の構造がペプチド上に残ると活性が低下するため（図2）、切断後にペプチド上から完全に脱離する無痕跡型リンカーを用いています。
活動の時期	2021年3月 論文発表
関連URL	http://www.phar.nagoya-cu.ac.jp/hp/ysk/index.html
researchmap URL	https://researchmap.jp/read0201061
関連する論文	<ul style="list-style-type: none"> ●H. Kitagawa, M. Kikuchi, S. Sato, H. Watanabe, N. Umezawa, M. Kato, Y. Hisamatsu, T. Umehara, T. Higuchi, <i>J. Med. Chem.</i>, 64,3707-3719 (2021) ●Y. Amano, N. Umezawa, S. Sato, H. Watanabe, T. Umehara, T. Higuchi, <i>Bioorg. Med. Chem.</i>, 25(3),1227-1234 (2017) ●N. Umezawa, Y. Noro, K. Ukai, N. Kato, T. Higuchi, <i>ChemBioChem</i>, 12(11), 1694-1698 (2011)
期待される効果、今後の展望	生体内では不安定なペプチドを環状にすることで、活性のコントロールに加え、生体内安定性の向上をねらっています。細胞膜透過性の向上や病変細胞への集積を可能とする化学構造を用い、ペプチド創薬への応用をめざしています。
所属	薬学研究科 精密有機反応学分野
氏名	梅澤 直樹
専門分野	生物有機化学、ケミカルバイオロジー、創薬化学



国費留学優先配置(特別枠)事業「環境健康安全学」プログラム



活動の概要	主に東南アジア諸国の①海外拠点校②大学間交流協定校から選抜された国費留学生に加え、本学の医学研究科、薬学研究科、理学研究科に入学した私費留学生と日本人学生が、「環境健康安全学」に関連した教育と研究を協働して行います。このプログラムでは、通常環境健康安全学に関連する講義科目の受講および研究に従事することに加えて、グローバルレベルでのSDGsに関連した課題について議論し解決策を提示するアクティブラーニングやSDGs関連機関でのインターンシップを行うなどの特色があります。
活動の時期	2020年度～2026年度
関連URL	MEXT scholarship 国際交流・留学 名古屋市立大学 (nagoya-cu.ac.jp)
期待される効果、今後の展望	このプログラムで学んだSDGsに関連する知識や経験を元に、プログラム受講生は東南アジア地域等でのSDGs関連のリーダーになることが期待されています。また、このプログラムの履修を通じて培われた人脈は、グローバルレベルでのSDGs課題解決に役立つことも期待されています。
所属	医学研究科、薬学研究科、理学研究科
氏名	高橋智、上島通浩、安井孝周、頭金正博、肥田重明、熊澤慶伯、雨夜徹
専門分野	公衆衛生、環境科学、衛生化学、生態学



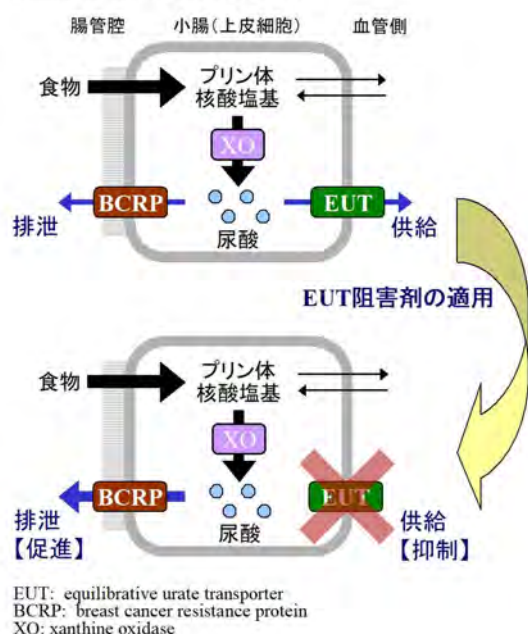
一期生アクティブラーニング発表会

小腸特異的な新規尿酸トランスポーターを標的とした尿酸関連疾患治療薬の開発



活動の概要	新たな尿酸トランスポーターとして同定されたEUTは、小腸上皮細胞で生成した尿酸の血中への供給経路として働いているとみられます。尿酸の体内動態においては、肝臓に次ぐ産生臓器、腎臓に次ぐ排泄臓器としての小腸の重要性が知られており、EUTの阻害によって血中への尿酸供給を抑制することで、小腸経路での尿酸排泄の促進が期待されます。この点から、EUT阻害剤は新たな機序による尿酸関連疾患(高尿酸血症・痛風等)治療薬として期待されます。また、EUT阻害物質には、健康食品ないしサプリメント成分としての活用の可能性も期待されます。
活動の時期	2020年9月 (論文発表)
関連URL	https://ncu-soyaku-kiban.jp/wp/wp-content/uploads/resource01.pdf
researchmap URL	https://researchmap.jp/ncu-biopharm-hy
関連する論文	Current understanding of the intestinal absorption of nucleobases and analogs. Hiroaki Yuasa; Tomoya Yasujima; Katsuhisa Inoue Biol. Pharm. Bull., 43, 1293-1300 (2020).
関連する特許	発明の名称：小腸上皮細胞特異的な尿酸トランスポーター及びその利用 公開番号：特開2019-31450 出願人：名古屋市立大学・東京薬科大学
期待される効果、今後の展望	EUT遺伝子導入発現系細胞を用い、EUT阻害剤の網羅的探索に取り組んでいます。尿酸関連疾患(高尿酸血症・痛風等)治療薬の候補となるEUT阻害剤について、その作用・効能に関わる検証を経て、実用化を目指します。また、各種の尿酸トランスポーターをはじめとして、広く多様なトランスポーター群の機能評価及び探索にも取り組んでいます。トランスポーター研究用材料(cDNA及び遺伝子導入発現系細胞)の提供や技術協力もできます。
所属	薬学研究科 薬物動態制御学分野
氏名	湯浅 博昭
専門分野	薬物動態学

小腸上皮細胞でのEUTの働き



透明な銅フィルムを用いた普遍的かつ持続可能な感染対策の開発



活動の概要	新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)のパンデミックにより、感染対策は医療現場に限らず、日常生活でも大きな課題となっています。抗ウイルス薬の開発は難しく、相次ぐ変異株や薬剤耐性にも対応する普遍的な抗ウイルス対策が求められています。私たちは、医療現場において多剤耐性菌による院内感染の予防対策として、銅の強い抗微生物作用に着目してきました。そして、これまでの産学共同研究により透明な銅フィルムを世界で初めて開発し、その強い抗菌作用を証明しました。これまでに透明な銅フィルムを用いたフェイスシールドやキーボードカバーなどを開発し、臨床応用しています。
活動の時期	2020年 論文発表 2020年 透明な銅フィルムを用いたフェイスシールドを開発。成果物を大学病院と大規模ワクチン接種会場へ寄付。
関連URL	株式会社UACJ リリース・お知らせ
researchmap URL	https://researchmap.jp/ncu-er.jp
関連する論文	Novel transparent copper film with antibacterial activity for environmental infection control. Matsushima A, Shibata S, Ohara H. Acute Med Surg. 2020; 7 : e543.
期待される効果、今後の展望	銅フィルムは安価であることから、医療現場から日常生活まで幅広く利用されることが期待されます。多剤耐性菌とともに新型コロナウイルスや今後も起こり得る新興感染症に対して、普遍的かつ持続可能な感染対策の開発につながる研究です。
所属	医学研究科 救命救急医療学
氏名	松嶋 麻子
専門分野	救急医学



アルミフレームと組み合わせたフェイスシールド



パソコン用キーボードカバー

概要

SDGs

学部学科

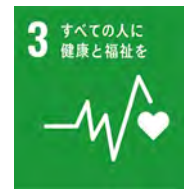
研究科コース

入試

ホーム > SDGs活動紹介 > ようこそ大学へ!プロジェクト—施設等の子どもたちへの学習支援

SDGs活動紹介

ようこそ大学へ!プロジェクト—施設等の子どもたちへの学習支援



担当者

谷口由希子:人間文化研究科(心理教育学科)、准教授、(専門分野)社会福祉学

本プロジェクトは、名古屋市内の児童養護施設などで生活する子どもへの学習支援と進学への動機づけを促すことを目的とするもので、2020年で8回目の開催を迎えます。2013年度から名古屋市の依頼を受け、名古屋市立大学人文社会学部を中心に実施する共同企画です。

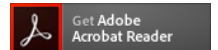
参加する子どもたちは、名古屋市内の児童養護施設や母子生活支援施設で暮らす小中学生約60人です。学生ボランティア(約50名)とともにプログラムを実施します。毎年、名古屋市立大学学長をはじめ、人文社会学部の多くの教職員が参加し、名古屋市からは副市長はじめ、子ども青少年局長、職員も参加します。

当日は、子どもたちと大学生がペアになり、子どもたちは「1日名市大生」になります。午前中は夏休みの宿題を一緒に行い、お昼は学生食堂で一緒にお昼ご飯を食べます。午後のプログラムは、1研究室訪問/教授カフェ(子どもたちがグループごとに研究室を訪問し教員に質問をします)2心理学実験(心理学の実験を体験します)、3大学探検(図書館や大学内の古墳等を学生が案内します)、その他、ダンス、アカベラ、学生講師によるクラフト企画等を提供し、学生生活を体験します。

※児童養護施設とは、なんらかの事情で保護者とともに暮らすことのできない子どもたちが生活している場であり、全国に約600ヶ所、約2万7千人(名古屋市は13ヶ所、約600人)の子どもたちがいます。

[ようこそ大学へ!プロジェクト \(PDF ファイル 0.28MB\)](#)

PDFファイルをご覧になるためには、[AdobeReader®](#) が必要です。パソコンにインストールされていない方は右のアイコンをクリックしてダウンロードしてください。



関連記事一覧

自死遺族に対する偏見とその低減に関する研究



担当者

山中亮:人間文化研究科(心理教育学科)、教授、(専門分野)臨床心理学

2006年に公布された自殺対策基本法の第一条には、「...自殺対策を総合的に推進して、自殺の防止を図り、あわせて自殺者の親族等の支援の充実を図り、もって国民が健康で生きがいをもって暮らすことのできる社会の実現に寄与することを目的とする」とされています。なぜあえて、自死遺族の支援の充実を図るということが強調されているのでしょうか?これは、そもそも自死遺族が社会的な圧力を受けやすい状況にあるという前提があると考えられます。こうした圧力を受けることによって自死遺族は大切な家族を失った苦痛だけでなく、社会的にも経済的にも、そして心理的にも困難を感じやすくなるのではないかと考えられます。

しかし元来日本は自殺に寛容な国だという指摘もあります。もしそうならば、自死遺族に対しても寛容であり、周囲の人々は遺族に対して偏見を向けたり、非難したりということはないかもしれません。果たして本当にそうでしょうか?こうした疑問を持って、心理学の視点から大学生を対象にいくつかの実証研究を行いました。その結果、他の死因(がんなど)で家族を亡くした遺族に比べて、自死遺族をより精神的に混乱し、死に対して責任を負っている人であるとみなし、接触する際には緊張を感じたり、好意を持てなかったり、共感しづらい対象であるとみなしていることが示されました。

こうした結果からも、日本においても自殺及び自死遺族への偏見が存在しており、自死遺族が生きづらい社会になっていることが推測できます。

今後はこうした偏見解消に向けた効果的な心理教育プログラムの開発などを行っていきたくと考えています。

[関連記事一覧](#)

概要

SDGs

学部学科

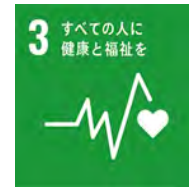
研究科コース

入試

ホーム > SDGs活動紹介 > 名古屋市子どもに関する総合計画への提案と行政職員との意見交換

SDGs活動紹介

名古屋市子どもに関する総合計画への提案と行政職員との意見交換



担当者

谷口由希子:人間文化研究科(心理教育学科)、准教授、(専門分野)社会福祉学

本企画は、名古屋市立大学の学生が、名古屋市の子どもの取り巻く課題について、フィールドワークを通して学び、課題と解決策について考察した結果を発表し、名古屋市子ども青少年局長はじめ、行政職員の方と意見交換を行ったものです。

発表を行った学生11名は、フィールドワークに行く前の事前学習として「なごや子ども・子育てわくわくプラン2015—名古屋市子どもに関する総合計画—」を学び、地域の課題について考察しました。その結果、フィールドワーク先として、1ひとり親家庭・生活困窮世帯の子どもたちへの学習支援事業、2ひとり親家庭の子どもの居場所づくり事業、3母子生活支援施設、4ひとり親家庭の文化スポーツ交流事業を選定しました。学生は、グループに分かれ、複数回にわたり事業実施先の見学を行い、子どもの支援に関わる実務家からお話を伺いました。これらの学びをもとに学生が議論を重ねた結果を名古屋市に発表することは、学生の社会参画の一環としても期待されます。

<提案のポイント>

1居場所事業に子ども食堂の機能を加える:手作りご飯の提供、地域巡回バスを利用した送迎の工夫

2学習支援事業の対象を小学生まで広げる

3ひとり親家庭の支援コミュニティを作る:ひとり親家庭と支援をしたい人のマッチング、ホームステイ

Goal 4

4 質の高い教育を
みんなに



2020年度 学生の環境に関する活動への支援



活動の概要	<p>学生の自治組織である名古屋市立大学学生会は、2011年に環境に配慮して行動することを宣言しています。この宣言に基づき、2020年度も学生の自主的な活動である課外活動や大学祭において、学生のアイデアによる環境保全の取り組み（開学記念日一斉清掃の実施や大学祭でのエコステーションの設置など）の支援を計画していました。</p> <p>しかし、新型コロナウイルス感染症により、学生の自主的な活動の実施形態が大きく影響を受けたため、当初の大学祭、課外活動での環境に関する取り組みを支援する計画を変更し、環境に関するオンラインイベントの参加促進を行いました。</p> <p>また、国際的な共同研究・支援活動として、世界の食糧生産と分配の改善と生活向上や生物多様性を目的とした国連食糧農業機関（FAO）でのインターンシップに関する協定を締結しています。</p>
活動の時期	2020年度
関連URL	環境報告書2020

2020年度 環境に関連した地域社会等との連携



<p>活動の概要</p>	<p>【環境に関連したテーマの講座等の開催】</p> <p>名古屋市科学館との連携により、中高生向けに、サイエンスパートナーシップイベント「物質科学と生命科学のリテラシー」を開催し、物質科学と生命科学の魅力を紹介しました。</p> <p>Zoom によるオンライン配信で、サイエンスカフェ in 名古屋 第 154 回「スコープで探る未知の世界～波打ち際に爆発的に進化したハゼたち～」を開催し、高校・中学校の生徒13名・教員2名を対象にハゼ類の生態を通して、環境保全の課題に関する講演を行いました。</p> <p>また、名古屋市環境局なごや生物多様性センターと共同で「なごや生物多様性シンポジウム～みんなでつなぐ生物多様性の未来～」を開催し、理学研究科附属生物多様性研究センターからの研究報告を行ったほか、専門家と県下 8 高校の高校生とのトークセッションなどを通じて、生物多様性の普及啓発を行いました。</p> <p>【市民と共に生物調査を行うイベントの開催】</p> <p>市民とともに名古屋市内の全区で生物調査を行うイベント「なごや生きもの一斉調査 2020 バッタ編」（2020年10月2日～4日）で、理学研究科生物多様性研究センターのスタッフ 2 名が調査の地点リーダーを務めるとともに、理学研究科・総合生命理学部の学生 3 名が一般調査員として参加しました。</p> <p>【名古屋市スポーツ市民局の消費者啓発事業との連携協力】</p> <p>名古屋市スポーツ市民局の消費者啓発事業に、人文社会学部の学生がゼミ活動として連携協力し、その一環で2021年1月 18 日～3月 31 日までオンラインで開催された「名古屋市消費生活フェア☆2020 オンライン展示会」でパネル展示を行いました。</p> <p>プラスチックにかわる素材としてセルロースを使ったマスクと食品保存用ラップの提案や、使い捨てプラスチック容器を回収する方法としてのデポジット制に関するパンフレット制作や社会実験の成果をパネルで発表しました。</p>
<p>活動の時期</p>	<p>2020年度実績</p>
<p>関連URL</p>	<p>環境報告書2020</p>

2020年度 環境問題への理解を深める教育の推進



活動の概要	<p>本学では、教養教育及び専門教育科目において、環境問題及びその周辺の諸課題を認識し、自ら解決方法を考えさせることを目標とした科目を開講しています。</p> <p>また、全学共通の教養教育科目においては、全学部生が履修できるよう、教養教育の環境関連の科目 15 科目を開講し、環境問題への理解と関心を深めるようにしています。</p> <p>学部専門教育科目において、授業科目「ESD 概論」では、気候変動や生物多様性の損失をはじめとする環境問題が、自らの生活と密接に結びついていることに気づき、どうしたら持続可能な地球環境の保全に取り組めるのかを身近な地域課題を取りあげながら検討し、実行しています。</p> <p>さらに、大学院教育においても、環境問題について様々な学問的手法による分析、現地調査などによる研究を取り入れた授業科目が提供されています。「建築設備設計特論」では、日本を含む世界のエネルギー消費事情と政策動向を概観し、地球環境と建築とのかかわりを知ることで、未来を担う一人ひとりがその責務を認知し行動に移すことを目指しており、この授業を通して、建築設計のなかで実現できる省エネ・環境負荷手法について理解でき、建築設計者として取り組める環境配慮策を身につけます。</p>
活動の時期	2020年度
関連URL	環境報告書2020

2020年度 国連食糧農業機関（FAO）へのインターンシップ生の派遣



<p>活動の概要</p>	<p>国連食糧農業機関（FAO、本部イタリア・ローマ）は世界の農林水産業の発展と農村開発に取り組む国連の専門機関です。1945年に設立され、196の加盟国（2つの準加盟国含む）およびEU（欧州連合）から成り、食糧安全保障や飢餓撲滅運動等の持続的開発目標（SDGs）の達成を目指しています。本学は2010年にFAOとインターンシップ派遣に関する協定を締結し、2011年度より同機関の水産局にインターン生派遣を開始しました。2018年度より、同機関のインターンシッププログラム見直しにより、インターンの派遣先が全世界のオフィスに拡大されました。</p> <p>2020年度は、学生1名がFAOフィリピン事務所による約3か月間のオンラインインターンシップに参加しました。</p>
<p>活動の時期</p>	<p>2011年度よりインターン生の派遣開始 2018年度よりインターンシッププログラム見直し 2020年度：派遣実績1名</p>
<p>関連URL</p>	<p>国連食糧農業機関(FAO)インターンシップ</p>

2020年度 名古屋市立大学高大連携授業



<p>活動の概要</p>	<p>名古屋市立大学では、高校生が本学学生と一緒に大学の通常の授業を履修できる「高大連携授業」を開講しています。</p> <p>「高大連携授業」は、意欲のある高校生に対し、多様な「学び」の機会を提供し、本学の教育研究に触れ、理解と関心を深めていただくことを目的としています。科目等履修生としてこの科目を受講し、試験に合格した場合、大学の単位を修得することができます。</p> <p>例年、全学部の大学1年生を対象とした教養教育のうち、2科目を開講しています。</p> <p>【2020年度開講科目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■バイオサイエンス入門：総合生命理学部 湯川泰教授、木村幸太郎教授、田上英明准教授 ■琉球・沖縄の歴史・文化を識る：人文社会学部 阪井芳貴教授
<p>活動の時期</p>	<p>2020年度後期（9月～1月）</p>
<p>関連URL</p>	<p>2020年度 開催報告</p>



「バイオサイエンス入門」の様子



「琉球・沖縄の歴史・文化を識る」の様子

SDGs AICHI EXPOでパネルを展示



活動の概要	本学は、2021年2月に開催された日本最大級のSDGs推進フェア「SDGs AICHI EXPO 2020」に、愛知学長懇話会参加大学としてオンライン出展しました。
活動の時期	2021年2月
関連URL	SDGs AICHI EXPO

SDGsギャラリー@東京海上日動でパネルを展示



活動の概要	2021年2月1日～2021年3月31日に名古屋東京海上日動ビルディング1階 東京海上日動ギャラリーで開催された「SDGsギャラリー@東京海上日動」（主催：東京海上日動火災保険株式会社）において、本学の活動をパネル展示しました。
活動の時期	2021年2月～3月

国費留学優先配置(特別枠)事業「環境健康安全学」プログラム

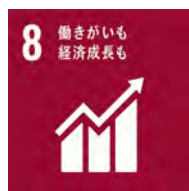


活動の概要	主に東南アジア諸国の①海外拠点校②大学間交流協定校から選抜された国費留学生に加え、本学の医学研究科、薬学研究科、理学研究科に入学した私費留学生と日本人学生が、「環境健康安全学」に関連した教育と研究を協働して行います。このプログラムでは、通常環境健康安全学に関連する講義科目の受講および研究に従事することに加えて、グローバルレベルでのSDGsに関連した課題について議論し解決策を提示するアクティブラーニングやSDGs関連機関でのインターンシップを行うなどの特色があります。
活動の時期	2020年度～2026年度
関連URL	MEXT scholarship 国際交流・留学 名古屋市立大学 (nagoya-cu.ac.jp)
期待される効果、今後の展望	このプログラムで学んだSDGsに関連する知識や経験を元に、プログラム受講生は東南アジア地域等でのSDGs関連のリーダーになることが期待されています。また、このプログラムの履修を通じて培われた人脈は、グローバルレベルでのSDGs課題解決に役立つことも期待されています。
所属	医学研究科、薬学研究科、理学研究科
氏名	高橋智、上島通浩、安井孝周、頭金正博、肥田重明、熊澤慶伯、雨夜徹
専門分野	公衆衛生、環境科学、衛生化学、生態学



一期生アクティブラーニング発表会

都市政策研究センター2020年度シンポジウム「SDGsの達成に向けた都市の役割」を開催



活動の概要	<p>「SDGsの達成に向けた都市の役割」をテーマに開催したシンポジウムを2021年1月18日（月）から24日（日）までYouTubeにて配信しました。国際連合地域開発センターの遠藤和重所長による「SDGsと都市の役割」をテーマとした基調講演に続いて、パネルディスカッションでは経済学研究科の鵜飼宏成教授のコーディネートのもと、芸術工学部卒業生でもある株式会社Rebuilding Center JAPANの東野唯史氏、名古屋市総務局長の中田英雄氏、人間文化研究科の伊藤恭彦教授の3名が、産官学のそれぞれの立場からSDGsの推進に向けて議論を交わしました。受講者からは「SDGs推進の経緯と背景、現状を認識した」などの声が寄せられました。</p> <p>※本件は本学広報誌『創新』Vol.39（2021年3月発行）に掲載されました。</p>
活動の時期	2021年1月
関連URL	名古屋市立大学都市政策研究センター2020年度シンポジウム

本学学生がSDGs IDEA FORUM 2020で最優秀賞、優秀賞を受賞！



活動の概要	SDGs達成に向けた名古屋市の地域課題を大学生のアイデアで解決することを目指して開催された「SDGs IDEA FORUM 2020」において、本学から参加した「NCU グローバル・ジャスティス・プロジェクト」（人文社会学部3年・4年）が最優秀賞を、「Act of New Ring」（人文社会学部1年）が優秀賞を獲得しました。 ※学年は2020年度を受賞当時
活動の時期	2021年2月
関連URL	SDGs IDEA FORUM 2020



最優秀賞

NCU グローバル・ジャスティス・プロジェクト
『デジロウの冒険—プラスチック容器のデジット新提案』
(人文社会学部3年・4年)
※学年は受賞当時



優秀賞

Act of New Ring
『みんなでつくろう地域の輪～絵本を通して見る世界～』
(人文社会学部1年)
※学年は受賞当時

Goal 5

5 ジェンダー平等を
実現しよう



イクボス宣言



活動の概要	名古屋市立大学では、2020年8月3日(月曜日)に「イクボス宣言」を行いました。 本学では、これまで、ダイバーシティ推進本部を立ち上げて、「ダイバーシティ宣言」を発信して、男女共同参画や次世代育成支援をはじめとしたワーク・ライフ・バランスの推進に取り組んでまいりました。この「イクボス宣言」を契機として、管理職員が自ら率先してワーク・ライフ・バランスの推進に努めるとともに、教職員が育児・介護などの事情を抱えていても、ワーク・ライフ・バランスの取れた働きやすい職場環境をつくることを目指します。
活動の時期	2020年8月3日
関連URL	イクボス宣言

ゲイ・バイセクシュアル男性を対象とした HIV 予防の推進



活動の概要	HIV感染症の予防、セクシュアルヘルスをテーマに研究しています。集団レベルでHIVの予防を推進するためには、感染リスクが高いポピュレーションを見極め、その対象者に効果的な予防介入を継続的に実施することが重要です。日本では、ゲイ・バイセクシュアル男性におけるHIV/AIDS感染拡大が最も深刻であり、彼らへのコミュニティベースの予防プログラムの立案、実施、評価に資する研究を当事者、NGO、行政、医療専門家、研究者のパートナーシップのもと行ってきました。平成28-30年度の厚生労働省エイズ対策政策研究事業では、乾燥血液スポット法(指先にランセット針を刺して取った血液をろ紙にしみこませ検査機関に送り、スクリーニング結果をWEBで確認する検査手法)を用いたコミュニティベースでのHIV検査機会の拡大を行います。
活動の時期	2005年～現在まで
関連する論文	<ol style="list-style-type: none"> 1. Noriyo Kaneko, Satoshi Shiono, Adam O. Hill, Takayuki Homma, Kohta Iwahashi, Masao Tateyama, Seiichi Ichikawa: Correlates of lifetime and past one-year HIV-testing experience among men who have sex with men in Japan, AIDS Care, 2020. DOI: 10.1080/09540121.2020.1837339 2. Nigel Sherriff, Jane Koerner, Noriyo Kaneko, Satoshi Shiono, Michiko Takaku, Ross Boseley, Seiichi Ichikawa: Everywhere in Japan: an international approach to working with commercial gay businesses in HIV prevention, Health Promotion International, 32(3), 522-534, 2017. doi: 10.1093/heapro/dav096. 3. 金子典代, 塩野徳史: コミュニティセンターに来場するゲイ・バイセクシュアル男性のHIV・エイズの最新情報の認知度とHIV検査経験, コンドーム使用との関連. 日本エイズ学会誌, 23(2), 78-86, 2021.
期待される効果、今後の展望	<p>通常の保健医療サービスが届きにくいマイノリティ集団にいかにもアクセスし、必要なサービスを提供していくかは大変難しい課題です。</p> <p>エイズ分野では、当事者、NGOが大きな力を発揮し、感染拡大の抑制に貢献してきました。この成果を目に見える形で残せるような、予防対策に資することができるような研究が必要だと考えています。また、エイズ予防の研究や取り組みにおいては、研究者、NGOや行政、医療、ボランティアの協働が鍵となります。研究においても、メンバーそれぞれの専門や能力を最大限に発揮できるチーム作りを重視しています。</p>
所属	看護学研究科 国際保健看護学
氏名	金子 典代
専門分野	HIV感染症、AIDSの予防、健康行動学、疫学



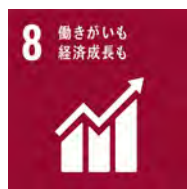
イギリスのブライトン大学との共同研究（英国でHIV検査キットを自動販売機で普及させる取り組みの成功事例の紹介を受けました）

名古屋市立大学男女共同参画奨励賞



活動の概要	名古屋市立大学男女共同参画奨励賞は、公立大学法人名古屋市立大学における男女共同参画宣言の趣旨に鑑み、男女共同参画社会の実現に関連する優れた研究・活動等を行っている本学の教職員および学生等に対して、学長から表彰を行うものです。
活動の時期	2013年以降
関連URL	男女共同参画奨励賞

名古屋市立大学男女共同参画宣言・男女共同参画行動計画



活動の概要	<p>2012年3月16日開催の名古屋市立大学男女共同参画フォーラム「多様性のあるゆたかな社会をめざして一大学で男女共同参画を考える」にて名古屋市立大学男女共同参画宣言を発表しました。</p> <p>また、本学の男女共同参画推進に対する行動計画を定めた「第4次男女共同参画行動計画」を策定し、本計画期間中には、女性上位職の登用推進とワーク・ライフ・バランスの実現に特に力を入れて男女共同参画の推進に取り組んでいます。</p>
活動の時期	<p>【男女共同参画宣言】2012年3月</p> <p>【第4次男女共同参画行動計画】2018年4月1日から2022年3月31日まで（1年延長）</p>
関連URL	<p>男女共同参画宣言・基本方針・行動計画・ポジティブアクション</p>

Goal 6

6 安全な水とトイレ
を世界中に



2020年度 地球温暖化対策計画書・実施状況書の作成

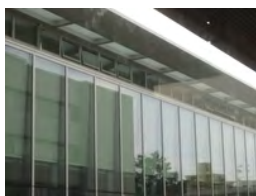


活動の概要	<p>名古屋市では、「市民の健康と安全を確保する環境の保全に関する条例」に基づき、事業活動における地球温暖化防止への自主的な取組みを促進することを目的に、一定規模以上の事業者は「地球温暖化対策計画書」を届け出ることを定めています。また、毎年度、地球温暖化対策の実施状況を届け出ることとなっております。</p> <p>本学も、名古屋市の「市民の健康と安全を確保する環境の保全に関する条例」に基づき、地球温暖化対策計画書及び地球温暖化対策実施状況書を作成し、本学WEBサイト上で公開しています。</p>
活動の時期	2020年度実績
関連URL	環境報告書2020

田辺通キャンパスにおける薬学部校舎改築に係る環境対策



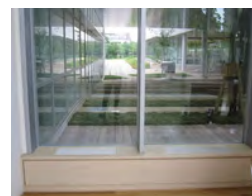
<p>活動の概要</p>	<p>田辺通キャンパスでは、2007年度～2009年度の校舎改築工事以降、以下のような環境対策を実施しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■キャンパスモール(アトリウム)へ自然換気システムと地熱利用のクールチューブを設置し、空調負荷の低減を図っています。 ■キャンパスモール(アトリウム)の窓ガラスに断熱性に優れたペアガラスを採用し、日射負荷の低減対策を実施しています。 ■照明及び誘導灯は高効率型器具を採用し、トイレには照明及び便器・手洗い水栓を自動化・節水型器具を採用しています。 <p>その他、各年度における取組みについては、本学の環境報告書をご覧ください。</p>
<p>活動の時期</p>	<p>2007年度～2009年度以降</p>
<p>関連URL</p>	<p>環境への主な取組み</p>



自然換気システム



室外のクールチューブ(吸込み)



室内のクールチューブ(噴出し)

Goal 7

7 エネルギーをみんなに
そしてクリーンに



2020年度 環境負荷低減のための省エネルギー・省資源の取り組み

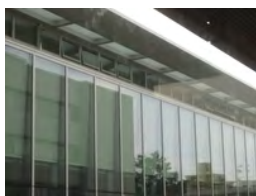


<p>活動の概要</p>	<p>(1) 2020年度の環境負荷低減のための省エネルギー・省資源の取り組み</p> <p>省エネ法（エネルギーの使用の合理化等に関する法律）に基づき、川澄キャンパスは第一種エネルギー管理指定工場等に指定されており、省エネルギー推進委員会を置いてエネルギー使用量の削減に取り組んでいます。</p> <p>【エネルギー使用量】</p> <p>2020年度の大学全体のエネルギー使用量は、電気約 34,204 千 kWh、ガス約 3,993 千 m³、水道約 291 千 m³となりました。対前年度比では、電気使用量は約 3.6%の削減、水道使用量は約 1.4%の削減となりました。</p> <p>【温室効果ガスの排出量】</p> <p>2020年度の温室効果ガス排出量は 25,711 t-CO₂ となり、前年度より 1.4%低い値となりました。</p> <p>(2) 2020年度のその他の環境負荷低減のための省エネルギー・省資源の取り組み</p> <p>【地球温暖化対策実施状況の報告】</p> <p>名古屋市の「市民の健康と安全を確保する環境の保全に関する条例」（環境保全条例）に基づき、温室効果ガスの排出量等を、地球温暖化対策実施状況書により名古屋市に報告しています。また、本学ウェブサイトにおいても、実施状況報告書・計画書を公開しております。</p> <p>【省エネ法定期報告に基づく事業者クラス分け評価】</p> <p>本学は、エネルギーの使用の合理化等に関する法律（省エネ法）に基づき、経済産業省中部経済産業局に対し、エネルギー使用状況等に関する定期報告を行っています。</p> <p>事業者クラス分け評価制度は、定期報告を評価し、提出する全ての事業者を S・A・B・C の 4 段階へクラス分けするものですが、本学は 2015 年度実績より毎年度 S クラス（省エネが優良な事業者）の評価を得ています。</p>
<p>活動の時期</p>	<p>2020年度実績</p>
<p>関連URL</p>	<p>環境報告書2020</p>

田辺通キャンパスにおける薬学部校舎改築に係る環境対策



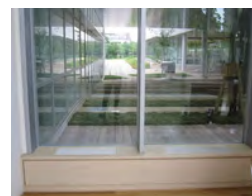
<p>活動の概要</p>	<p>田辺通キャンパスでは、2007年度～2009年度の校舎改築工事以降、以下のような環境対策を実施しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■キャンパスモール(アトリウム)へ自然換気システムと地熱利用のクールチューブを設置し、空調負荷の低減を図っています。 ■キャンパスモール(アトリウム)の窓ガラスに断熱性に優れたペアガラスを採用し、日射負荷の低減対策を実施しています。 ■照明及び誘導灯は高効率型器具を採用し、トイレには照明及び便器・手洗い水栓を自動化・節水型器具を採用しています。 <p>その他、各年度における取組みについては、本学の環境報告書をご覧ください。</p>
<p>活動の時期</p>	<p>2007年度～2009年度以降</p>
<p>関連URL</p>	<p>環境への主な取組み</p>



自然換気システム



室外のクールチューブ(吸込み)



室内のクールチューブ(噴出し)

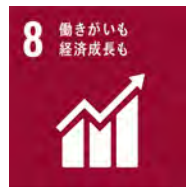
Goal 8

8

働きがいも
経済成長も

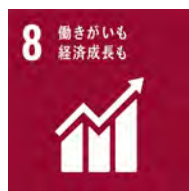


イクボス宣言



活動の概要	名古屋市立大学では、2020年8月3日(月曜日)に「イクボス宣言」を行いました。 本学では、これまで、ダイバーシティ推進本部を立ち上げて、「ダイバーシティ宣言」を発信して、男女共同参画や次世代育成支援をはじめとしたワーク・ライフ・バランスの推進に取り組んでまいりました。この「イクボス宣言」を契機として、管理職員が自ら率先してワーク・ライフ・バランスの推進に努めるとともに、教職員が育児・介護などの事情を抱えていても、ワーク・ライフ・バランスの取れた働きやすい職場環境をつくることを目指します。
活動の時期	2020年8月3日
関連URL	イクボス宣言

都市政策研究センター2020年度シンポジウム「SDGsの達成に向けた都市の役割」を開催



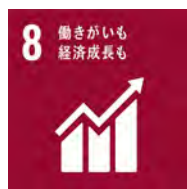
活動の概要	<p>「SDGsの達成に向けた都市の役割」をテーマに開催したシンポジウムを2021年1月18日（月）から24日（日）までYouTubeにて配信しました。国際連合地域開発センターの遠藤和重所長による「SDGsと都市の役割」をテーマとした基調講演に続いて、パネルディスカッションでは経済学研究科の鵜飼宏成教授のコーディネートのもと、芸術工学部卒業生でもある株式会社Rebuilding Center JAPANの東野唯史氏、名古屋市総務局長の中田英雄氏、人間文化研究科の伊藤恭彦教授の3名が、産官学のそれぞれの立場からSDGsの推進に向けて議論を交わしました。受講者からは「SDGs推進の経緯と背景、現状を認識した」などの声が寄せられました。</p> <p>※本件は本学広報誌『創新』Vol.39（2021年3月発行）に掲載されました。</p>
活動の時期	2021年1月
関連URL	名古屋市立大学都市政策研究センター2020年度シンポジウム

名古屋市立大学男女共同参画奨励賞



活動の概要	名古屋市立大学男女共同参画奨励賞は、公立大学法人名古屋市立大学における男女共同参画宣言の趣旨に鑑み、男女共同参画社会の実現に関連する優れた研究・活動等を行っている本学の教職員および学生等に対して、学長から表彰を行うものです。
活動の時期	2013年以降
関連URL	男女共同参画奨励賞

名古屋市立大学男女共同参画宣言・男女共同参画行動計画



活動の概要	<p>2012年3月16日開催の名古屋市立大学男女共同参画フォーラム「多様性のあるゆたかな社会をめざして一大学で男女共同参画を考える」にて名古屋市立大学男女共同参画宣言を発表しました。</p> <p>また、本学の男女共同参画推進に対する行動計画を定めた「第4次男女共同参画行動計画」を策定し、本計画期間中には、女性上位職の登用推進とワーク・ライフ・バランスの実現に特に力を入れて男女共同参画の推進に取り組んでいます。</p>
活動の時期	<p>【男女共同参画宣言】2012年3月</p> <p>【第4次男女共同参画行動計画】2018年4月1日から2022年3月31日まで（1年延長）</p>
関連URL	<p>男女共同参画宣言・基本方針・行動計画・ポジティブアクション</p>

概要

SDGs

学部学科

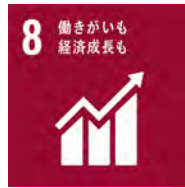
研究科コース

入試

ホーム > SDGs活動紹介 > リニア開発主義の構造と主体—名古屋駅周辺の再編をめぐる開発体制の検証

SDGs活動紹介

リニア開発主義の構造と主体—名古屋駅周辺の再編をめぐる開発体制の検証



担当者	林 浩一郎:人間文化研究科(現代社会学科)、准教授、(専門分野)地域社会学
-----	---------------------------------------

本研究は、名古屋駅周辺における「リニア開発主義」の構造と主体を考察する社会学的研究です。「リニア開発主義」とは、2027年のリニア中央新幹線開通を契機として、経済成長を目指す政治経済システムとそのイデオロギーのことです(林 2020a)。

高度経済成長期のケインズ主義的な「均等発展」という国土開発の建前から、「選択と集中」を志向する新自由主義的な「都市再生」政策へという潮流のなかで、「リニア・インパクト」(江口 2014)に関する考察は喫緊の課題です。リニア開発主義とは、ケインズ主義の開発主義か、新自由主義化された開発主義か、その混合か。リニア開発主義は、名古屋駅周辺にどのようなインパクトを及ぼすのか。「新自由主義化する都市」論(Brenner and Theodore 2002)を批判的に参照し、考察しています。

筆者が、名古屋駅西地区の都市コミュニティを、木田勇輔先生(椋山女学園大学)が名古屋駅周辺の都市政治を、植田剛史先生(愛知大学)が都市空間を調査研究しています(科研費20K02159基盤研究(C)2020~2024年度)。これらにより、名古屋の都市空間をダイナミックに変動させる新たな開発の論理を明らかにします。

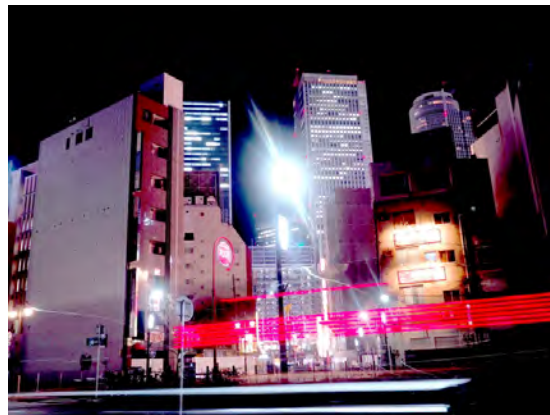
【論文】

林浩一郎,2016,「『リニア・インパクト』を見据えた都市戦略——名古屋駅西側の再編をめぐる『まちづくり体制』の構築」『計画行政と中部』29.

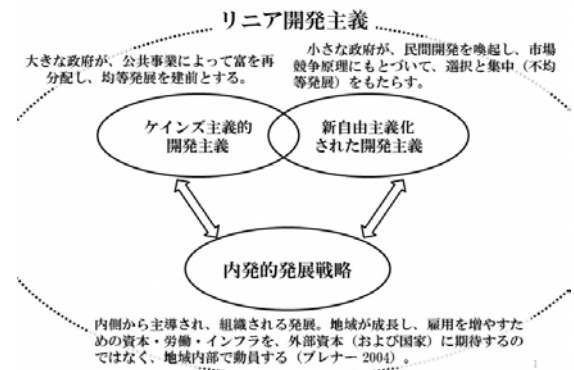
——,2019,「『リニア・インパクト』を見据えた稼ぐまちづくり運動の行方——名古屋駅西側の再編をめぐるエリアリノベーション戦略」『東海社会学年報』11.

——,2020a,「リニア開発主義の構造と主体——名古屋駅西地区におけるリノベーション事業と「草の根」の新自由主義」『日本都市社会学年報』36.(印刷中)

——,2020b,「『都市再生』の社会学——開発主義のなかを生きる」『転換期・名古屋の都市公共政策』ミネルヴァ書房.(印刷中)



リニア開発が迫る名古屋駅西側地区



リニア開発主義の枠組

Goal 9

9

産業と技術革新の
基盤をつくろう



「脳のはたらき」を推定する技術の開発



活動の概要	さまざまな技術的な発展により、ヒトや実験動物の行動や脳活動のデータを精度良く測定することが可能になってきています。しかし、測定された行動や脳活動のデータから「脳のはたらき」を適切に推定する技術はほとんど存在していません。私たちは、これまでの基礎生命科学研究で培った経験を元にして、脳のはたらきを適切に理解するための人工知能技術などの開発を行っています。
活動の時期	2019年6月（論文発表） 2020年10月（論文発表） 2021年3月（論文発表） 2021年9月（論文発表）
関連URL	研究室WEBサイト 動物行動の人工知能解析に関する異分野融合研究に関して；2021年8月17日公開 Wen et al., eLife 2021に関して；2021年6月30日掲載 動物行動の人工知能解析に関する異分野融合研究に関して；2021年12月24日に公開
researchmap URL	https://researchmap.jp/kokimura/
関連する論文	Maekawa T, Kimura KD. (他16名) (2020) Nat Commun, 11: 5316. Wen C, Kimura KD. (他12名) (2021) eLife, 10: e59187. Maekawa T, Kimura KD. (他6名) (2021) Nat Commun, 12: 5519.
期待される効果、今後の展望	私たちの研究室の主な研究対象は「線虫」ですが、シンプルで解析が容易な線虫を研究して技術開発を行えば、それが高等動物やヒトの生命機能の理解につながるものが分かってきました。行動や脳活動の測定データから得られた知識と、脳機能障害や薬理効果に関する基礎生物学的な知見を独自の方法で組み合わせることで「脳のはたらき」が理解できるようになると考えています。このように、他の研究者の方々とは全く違った角度から、社会に貢献していく所存です。
所属	理学研究科 生命情報系
氏名	木村 幸太郎
専門分野	神経科学、分子遺伝学、光生理学（イメージング）

2020年度 名古屋市立大学高大連携授業



<p>活動の概要</p>	<p>名古屋市立大学では、高校生が本学学生と一緒に大学の通常の授業を履修できる「高大連携授業」を開講しています。</p> <p>「高大連携授業」は、意欲のある高校生に対し、多様な「学び」の機会を提供し、本学の教育研究に触れ、理解と関心を深めていただくことを目的としています。科目等履修生としてこの科目を受講し、試験に合格した場合、大学の単位を修得することができます。</p> <p>例年、全学部の大学1年生を対象とした教養教育のうち、2科目を開講しています。</p> <p>【2020年度開講科目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■バイオサイエンス入門：総合生命理学部 湯川泰教授、木村幸太郎教授、田上英明准教授 ■琉球・沖縄の歴史・文化を識る：人文社会学部 阪井芳貴教授
<p>活動の時期</p>	<p>2020年度後期（9月～1月）</p>
<p>関連URL</p>	<p>2020年度 開催報告</p>



「バイオサイエンス入門」の様子

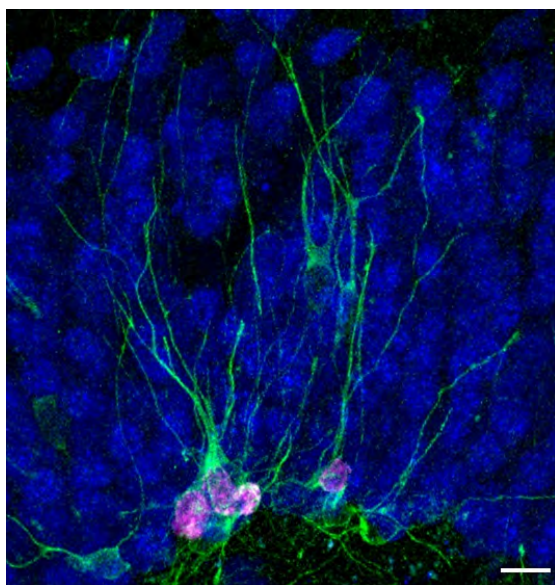


「琉球・沖縄の歴史・文化を識る」の様子

コモンマーモセット成体海馬ニューロン新生に関する 新しい論文の掲載



活動の概要	慢性ウイルス性肝炎および悪性腫瘍の治療に使用される炎症性サイトカインであるインターフェロンアルファ（IFNα）は、患者に鬱病症状を引き起こすことがあります。我々は過去に、IFNα治療がマウスの海馬神経新生を減少させることを示しました。今回の研究では、コモンマーモセットを用いて、4週間のIFNα治療の結果を調査し、IFNα治療がコモンマーモセットの行動変化と海馬における神経新生の減少を引き起こすことを示唆しました。
活動の時期	2020年6月27日（論文発表）
関連URL	コモンマーモセット成体海馬ニューロン新生に関する新しい論文の掲載
researchmap URL	https://researchmap.jp/read0094185
関連する論文	Kaneko N, Nakamura S, Sawamoto K. Effects of interferon-alpha on hippocampal neurogenesis and behavior in common marmosets. Mol Brain 13: 98 (2020) doi: 10.1186/s13041-020-00639-9, Micro report, Open Access, Published: 26 Jun 2020
期待される効果、今後の展望	霊長類におけるニューロン新生の特長について、今後さらに研究を進めることで、ヒトの脳疾患の病態解明や予防・治療開発に貢献する可能性があります。
所属	医学研究科 脳神経科学研究所 神経発達・再生医学分野
氏名	澤本 和延
専門分野	再生医学 神経科学



国費留学優先配置(特別枠)事業「環境健康安全学」プログラム



活動の概要	主に東南アジア諸国の①海外拠点校②大学間交流協定校から選抜された国費留学生に加え、本学の医学研究科、薬学研究科、理学研究科に入学した私費留学生と日本人学生が、「環境健康安全学」に関連した教育と研究を協働して行います。このプログラムでは、通常環境健康安全学に関連する講義科目の受講および研究に従事することに加えて、グローバルレベルでのSDGsに関連した課題について議論し解決策を提示するアクティブラーニングやSDGs関連機関でのインターンシップを行うなどの特色があります。
活動の時期	2020年度～2026年度
関連URL	MEXT scholarship 国際交流・留学 名古屋市立大学 (nagoya-cu.ac.jp)
期待される効果、今後の展望	このプログラムで学んだSDGsに関連する知識や経験を元に、プログラム受講生は東南アジア地域等でのSDGs関連のリーダーになることが期待されています。また、このプログラムの履修を通じて培われた人脈は、グローバルレベルでのSDGs課題解決に役立つことも期待されています。
所属	医学研究科、薬学研究科、理学研究科
氏名	高橋智、上島通浩、安井孝周、頭金正博、肥田重明、熊澤慶伯、雨夜徹
専門分野	公衆衛生、環境科学、衛生化学、生態学



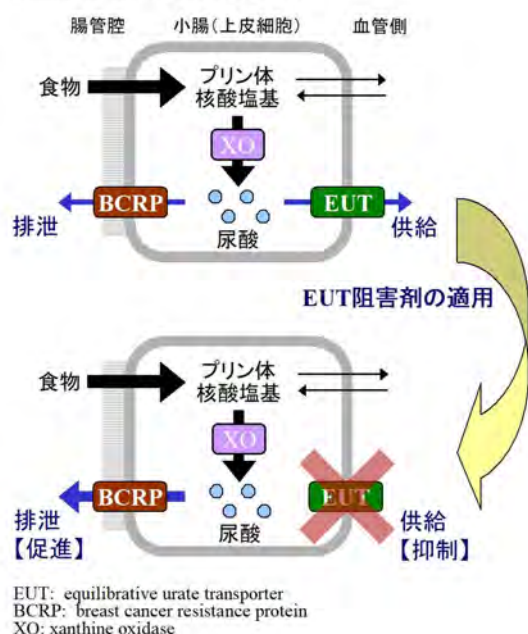
一期生アクティブラーニング発表会

小腸特異的な新規尿酸トランスポーターを標的とした尿酸関連疾患治療薬の開発



活動の概要	新たな尿酸トランスポーターとして同定されたEUTは、小腸上皮細胞で生成した尿酸の血中への供給経路として働いているとみられます。尿酸の体内動態においては、肝臓に次ぐ産生臓器、腎臓に次ぐ排泄臓器としての小腸の重要性が知られており、EUTの阻害によって血中への尿酸供給を抑制することで、小腸経路での尿酸排泄の促進が期待されます。この点から、EUT阻害剤は新たな機序による尿酸関連疾患(高尿酸血症・痛風等)治療薬として期待されます。また、EUT阻害物質には、健康食品ないしサプリメント成分としての活用の可能性も期待されます。
活動の時期	2020年9月 (論文発表)
関連URL	https://ncu-soyaku-kiban.jp/wp/wp-content/uploads/resource01.pdf
researchmap URL	https://researchmap.jp/ncu-biopharm-hy
関連する論文	Current understanding of the intestinal absorption of nucleobases and analogs. Hiroaki Yuasa; Tomoya Yasujima; Katsuhisa Inoue Biol. Pharm. Bull., 43, 1293-1300 (2020).
関連する特許	発明の名称：小腸上皮細胞特異的な尿酸トランスポーター及びその利用 公開番号：特開2019-31450 出願人：名古屋市立大学・東京薬科大学
期待される効果、今後の展望	EUT遺伝子導入発現系細胞を用い、EUT阻害剤の網羅的探索に取り組んでいます。尿酸関連疾患(高尿酸血症・痛風等)治療薬の候補となるEUT阻害剤について、その作用・効能に関わる検証を経て、実用化を目指します。また、各種の尿酸トランスポーターをはじめとして、広く多様なトランスポーター群の機能評価及び探索にも取り組んでいます。トランスポーター研究用材料(cDNA及び遺伝子導入発現系細胞)の提供や技術協力もできます。
所属	薬学研究科 薬物動態制御学分野
氏名	湯浅 博昭
専門分野	薬物動態学

小腸上皮細胞でのEUTの働き



概要

SDGs

学部学科

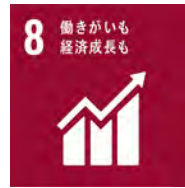
研究科コース

入試

ホーム > SDGs活動紹介 > リニア開発主義の構造と主体—名古屋駅周辺の再編をめぐる開発体制の検証

SDGs活動紹介

リニア開発主義の構造と主体—名古屋駅周辺の再編をめぐる開発体制の検証



担当者	林 浩一郎:人間文化研究科(現代社会学科)、准教授、(専門分野)地域社会学
-----	---------------------------------------

本研究は、名古屋駅周辺における「リニア開発主義」の構造と主体を考察する社会学的研究です。「リニア開発主義」とは、2027年のリニア中央新幹線開通を契機として、経済成長を目指す政治経済システムとそのイデオロギーのことです(林 2020a)。

高度経済成長期のケインズ主義的な「均等発展」という国土開発の建前から、「選択と集中」を志向する新自由主義的な「都市再生」政策へという潮流のなかで、「リニア・インパクト」(江口 2014)に関する考察は喫緊の課題です。リニア開発主義とは、ケインズ主義の開発主義か、新自由主義化された開発主義か、その混合か。リニア開発主義は、名古屋駅周辺にどのようなインパクトを及ぼすのか。「新自由主義化する都市」論(Brenner and Theodore 2002)を批判的に参照し、考察しています。

筆者が、名古屋駅西地区の都市コミュニティを、木田勇輔先生(椋山女学園大学)が名古屋駅周辺の都市政治を、植田剛史先生(愛知大学)が都市空間を調査研究しています(科研費20K02159基盤研究(C)2020~2024年度)。これらにより、名古屋の都市空間をダイナミックに変動させる新たな開発の論理を明らかにします。

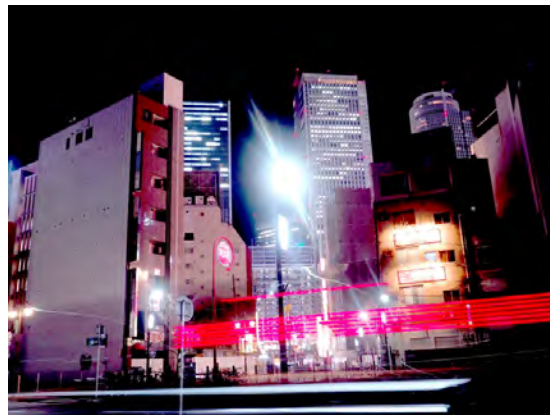
【論文】

林浩一郎,2016,「『リニア・インパクト』を見据えた都市戦略——名古屋駅西側の再編をめぐる『まちづくり体制』の構築」『計画行政と中部』29.

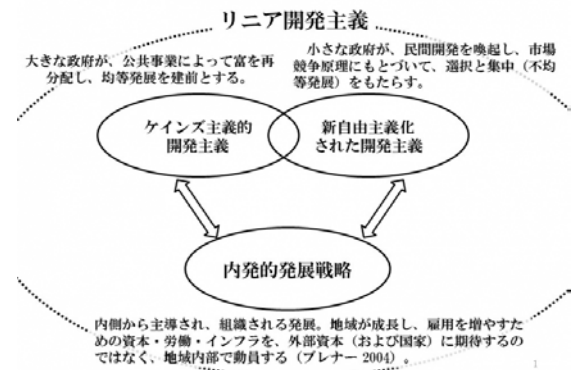
——,2019,「『リニア・インパクト』を見据えた稼ぐまちづくり運動の行方——名古屋駅西側の再編をめぐるエリアリノベーション戦略」『東海社会学年報』11.

——,2020a,「リニア開発主義の構造と主体——名古屋駅西地区におけるリノベーション事業と『草の根の新自由主義』」『日本都市社会学年報』36.(印刷中)

——,2020b,「『都市再生』の社会学——開発主義のなかを生きる」『転換期・名古屋の都市公共政策』ミネルヴァ書房.(印刷中)



リニア開発が迫る名古屋駅西側地区



リニア開発主義の枠組

Goal 10



2020年度 愛知県で生活する外国人の保健医療アクセスを考える活動



活動の概要	<p>「愛知県で生活する外国人の保健医療アクセスを考える」研究を教育や活動とリンクさせながら継続しています。</p> <p>研究成果は学術発表するとともに、名古屋国際センターとの共催によるオープンフォーラムの開催や、前年度の活動をまとめた報告書の発行を通して、関係者にフィードバックしています。</p> <p>また、フィリピンルーツの子どもたちのためのインフォーマルスクールでの健診と健康教育を毎年看護学部生とともに実施しています。</p>
活動の時期	<p>【フォーラム開催】2021年2月27日</p> <p>【フィリピン子ども学校での健診】2021年2月12日</p>
関連URL	<p>名古屋市立大学看護学研究科国際保健看護学WEBサイト</p> <p>調査結果パンフレット（2021年4月）</p>
researchmap URL	<p>https://researchmap.jp/read0145307</p>
関連する論文	<p>- Asako Yoshino, Reginald B Salonga, Michiyo Higuchi. Associations between social support and access to healthcare among Filipino women living in Japan. Nagoya J Med Sci. 2021; 83; 551-565.</p> <p>- Michiyo Higuchi, Maki Endo, Asako Yoshino. Factors associated with access to health care among foreign residents living in Aichi Prefecture, Japan: secondary data analysis. Int J Equity Health. 2021; 20(1): 135.</p> <p>- 服部舞, 西村知亜紀, 樋口倫代. 愛知県54市町村の公式ウェブサイトによる外国人住民向け医療情報の提供状況. 国際保健医療. 2019; 34; 185-194.</p>
期待される効果、今後の展望	<p>NGO、フィリピン人、ベトナム人のコミュニティ、日本語学校、行政などにご協力いただき、さまざまな角度から外国人の保健医療へのアクセスの状況や関連要因を探り、学生や仕事をしていない人がリスクグループであること、ソーシャル・サポートが関連要因であることなどがわかってきました。</p> <p>対象地域を拡大し、サポートになる情報はどのようなものかを調べる研究に発展させています。また、健診・健康教育の開催場所を増やしていく予定です。</p>
所属	看護学研究科
氏名	樋口 倫代
専門分野	公衆衛生



国際子ども学校での健康教育（食べ物分類ゲーム）

2020年度 国連食糧農業機関（FAO）へのインターンシップ生の派遣



<p>活動の概要</p>	<p>国連食糧農業機関（FAO、本部イタリア・ローマ）は世界の農林水産業の発展と農村開発に取り組む国連の専門機関です。1945年に設立され、196の加盟国（2つの準加盟国含む）およびEU（欧州連合）から成り、食糧安全保障や飢餓撲滅運動等の持続的開発目標（SDGs）の達成を目指しています。本学は2010年にFAOとインターンシップ派遣に関する協定を締結し、2011年度より同機関の水産局にインターン生派遣を開始しました。2018年度より、同機関のインターンシッププログラム見直しにより、インターンの派遣先が全世界のオフィスに拡大されました。</p> <p>2020年度は、学生1名がFAOフィリピン事務所による約3か月間のオンラインインターンシップに参加しました。</p>
<p>活動の時期</p>	<p>2011年度よりインターン生の派遣開始 2018年度よりインターンシッププログラム見直し 2020年度：派遣実績1名</p>
<p>関連URL</p>	<p>国連食糧農業機関(FAO)インターンシップ</p>

イクボス宣言



活動の概要	名古屋市立大学では、2020年8月3日(月曜日)に「イクボス宣言」を行いました。 本学では、これまで、ダイバーシティ推進本部を立ち上げて、「ダイバーシティ宣言」を発信して、男女共同参画や次世代育成支援をはじめとしたワーク・ライフ・バランスの推進に取り組んでまいりました。この「イクボス宣言」を契機として、管理職員が自ら率先してワーク・ライフ・バランスの推進に努めるとともに、教職員が育児・介護などの事情を抱えていても、ワーク・ライフ・バランスの取れた働きやすい職場環境をつくることを目指します。
活動の時期	2020年8月3日
関連URL	イクボス宣言

本学学生がSDGs IDEA FORUM 2020で最優秀賞、優秀賞を受賞！



活動の概要	SDGs達成に向けた名古屋市の地域課題を大学生のアイデアで解決することを目指して開催された「SDGs IDEA FORUM 2020」において、本学から参加した「NCUグローバル・ジャスティス・プロジェクト」（人文社会学部3年・4年）が最優秀賞を、「Act of New Ring」（人文社会学部1年）が優秀賞を獲得しました。 ※学年は2020年度を受賞当時
活動の時期	2021年2月
関連URL	SDGs IDEA FORUM 2020



最優秀賞

NCUグローバル・ジャスティス・プロジェクト
『デジロウの冒険—プラスチック容器のデジット新提案』
(人文社会学部3年・4年)
※学年は受賞当時



優秀賞

Act of New Ring
『みんなで作ろう地域の輪～絵本を通して見る世界～』
(人文社会学部1年)
※学年は受賞当時

自死遺族に対する偏見とその低減に関する研究



担当者

山中亮:人間文化研究科(心理教育学科)、教授、(専門分野)臨床心理学

2006年に公布された自殺対策基本法の第一条には、「...自殺対策を総合的に推進して、自殺の防止を図り、あわせて自殺者の親族等の支援の充実を図り、もって国民が健康で生きがいをもって暮らすことのできる社会の実現に寄与することを目的とする」とされています。なぜあえて、自死遺族の支援の充実を図るということが強調されているのでしょうか?これは、そもそも自死遺族が社会的な圧力を受けやすい状況にあるという前提があると考えられます。こうした圧力を受けることによって自死遺族は大切な家族を失った苦痛だけでなく、社会的にも経済的にも、そして心理的にも困難を感じやすくなるのではないかと考えられます。

しかし元来日本は自殺に寛容な国だという指摘もあります。もしそうならば、自死遺族に対しても寛容であり、周囲の人々は遺族に対して偏見を向けたり、非難したりということはないかもしれません。果たして本当にそうでしょうか?こうした疑問を持って、心理学の視点から大学生を対象にいくつかの実証研究を行いました。その結果、他の死因(がんなど)で家族を亡くした遺族に比べて、自死遺族をより精神的に混乱し、死に対して責任を負っている人であるとみなし、接触する際には緊張を感じたり、好意を持てなかったり、共感しづらい対象であるとみなしていることが示されました。

こうした結果からも、日本においても自殺及び自死遺族への偏見が存在しており、自死遺族が生きづらい社会になっていることが推測できます。

今後はこうした偏見解消に向けた効果的な心理教育プログラムの開発などを行っていきたいと考えています。

[関連記事一覧](#)

Goal 11



2020年度 愛知県で生活する外国人の保健医療アクセスを考える活動



活動の概要	<p>「愛知県で生活する外国人の保健医療アクセスを考える」研究を教育や活動とリンクさせながら継続しています。</p> <p>研究成果は学術発表するとともに、名古屋国際センターとの共催によるオープンフォーラムの開催や、前年度の活動をまとめた報告書の発行を通して、関係者にフィードバックしています。</p> <p>また、フィリピンルーツの子どもたちのためのインフォーマルスクールでの健診と健康教育を毎年看護学部生とともに実施しています。</p>
活動の時期	<p>【フォーラム開催】2021年2月27日</p> <p>【フィリピン子ども学校での健診】2021年2月12日</p>
関連URL	<p>名古屋市立大学看護学研究科国際保健看護学WEBサイト</p> <p>調査結果パンフレット（2021年4月）</p>
researchmap URL	https://researchmap.jp/read0145307
関連する論文	<p>- Asako Yoshino, Reginald B Salonga, Michiyo Higuchi. Associations between social support and access to healthcare among Filipino women living in Japan. Nagoya J Med Sci. 2021; 83; 551-565.</p> <p>- Michiyo Higuchi, Maki Endo, Asako Yoshino. Factors associated with access to health care among foreign residents living in Aichi Prefecture, Japan: secondary data analysis. Int J Equity Health. 2021; 20(1): 135.</p> <p>- 服部舞, 西村知亜紀, 樋口倫代. 愛知県54市町村の公式ウェブサイトによる外国人住民向け医療情報の提供状況. 国際保健医療. 2019; 34; 185-194.</p>
期待される効果、今後の展望	<p>NGO、フィリピン人、ベトナム人のコミュニティ、日本語学校、行政などにご協力いただき、さまざまな角度から外国人の保健医療へのアクセスの状況や関連要因を探り、学生や仕事をしていない人がリスクグループであること、ソーシャル・サポートが関連要因であることなどがわかってきました。</p> <p>対象地域を拡大し、サポートになる情報はどのようなものかを調べる研究に発展させています。また、健診・健康教育の開催場所を増やしていく予定です。</p>
所属	看護学研究科
氏名	樋口 倫代
専門分野	公衆衛生



国際子ども学校での健康教育（食べ物分類ゲーム）

2020年度 環境負荷低減のための省エネルギー・省資源の取り組み



<p>活動の概要</p>	<p>(1) 2020年度の環境負荷低減のための省エネルギー・省資源の取り組み 省エネ法（エネルギーの使用の合理化等に関する法律）に基づき、川澄キャンパスは第一種エネルギー管理指定工場等に指定されており、省エネルギー推進委員会を置いてエネルギー使用量の削減に取り組んでいます。</p> <p>【エネルギー使用量】 2020年度の大学全体のエネルギー使用量は、電気約 34,204 千 kWh、ガス約 3,993 千 m³、水道約 291 千 m³となりました。対前年度比では、電気使用量は約 3.6%の削減、水道使用量は約 1.4%の削減となりました。</p> <p>【温室効果ガスの排出量】 2020年度の温室効果ガス排出量は 25,711 t-CO₂ となり、前年度より 1.4%低い値となりました。</p> <p>(2) 2020年度のその他の環境負荷低減のための省エネルギー・省資源の取り組み</p> <p>【地球温暖化対策実施状況の報告】 名古屋市の「市民の健康と安全を確保する環境の保全に関する条例」（環境保全条例）に基づき、温室効果ガスの排出量等を、地球温暖化対策実施状況書により名古屋市に報告しています。また、本学ウェブサイトにおいても、実施状況報告書・計画書を公開しております。</p> <p>【省エネ法定期報告に基づく事業者クラス分け評価】 本学は、エネルギーの使用の合理化等に関する法律（省エネ法）に基づき、経済産業省中部経済産業局に対し、エネルギー使用状況等に関する定期報告を行っています。</p> <p>事業者クラス分け評価制度は、定期報告を評価し、提出する全ての事業者を S・A・B・C の 4 段階へクラス分けするものですが、本学は 2015 年度実績より毎年度 S クラス（省エネが優良な事業者）の評価を得ています。</p>
<p>活動の時期</p>	<p>2020年度実績</p>
<p>関連URL</p>	<p>環境報告書2020</p>

2020年度 名古屋市立大学高大連携授業



<p>活動の概要</p>	<p>名古屋市立大学では、高校生が本学学生と一緒に大学の通常の授業を履修できる「高大連携授業」を開講しています。</p> <p>「高大連携授業」は、意欲のある高校生に対し、多様な「学び」の機会を提供し、本学の教育研究に触れ、理解と関心を深めていただくことを目的としています。科目等履修生としてこの科目を受講し、試験に合格した場合、大学の単位を修得することができます。</p> <p>例年、全学部の大1年生を対象とした教養教育のうち、2科目を開講しています。</p> <p>【2020年度開講科目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■バイオサイエンス入門：総合生命理学部 湯川泰教授、木村幸太郎教授、田上英明准教授 ■琉球・沖縄の歴史・文化を識る：人文社会学部 阪井芳貴教授
<p>活動の時期</p>	<p>2020年度後期（9月～1月）</p>
<p>関連URL</p>	<p>2020年度 開催報告</p>



「バイオサイエンス入門」の様子



「琉球・沖縄の歴史・文化を識る」の様子

国費留学優先配置(特別枠)事業「環境健康安全学」プログラム



活動の概要	主に東南アジア諸国の①海外拠点校②大学間交流協定校から選抜された国費留学生に加え、本学の医学研究科、薬学研究科、理学研究科に入学した私費留学生と日本人学生が、「環境健康安全学」に関連した教育と研究を協働して行います。このプログラムでは、通常環境健康安全学に関連する講義科目の受講および研究に従事することに加えて、グローバルレベルでのSDGsに関連した課題について議論し解決策を提示するアクティブラーニングやSDGs関連機関でのインターンシップを行うなどの特色があります。
活動の時期	2020年度～2026年度
関連URL	MEXT scholarship 国際交流・留学 名古屋市立大学 (nagoya-cu.ac.jp)
期待される効果、今後の展望	このプログラムで学んだSDGsに関連する知識や経験を元に、プログラム受講生は東南アジア地域等でのSDGs関連のリーダーになることが期待されています。また、このプログラムの履修を通じて培われた人脈は、グローバルレベルでのSDGs課題解決に役立つことも期待されています。
所属	医学研究科、薬学研究科、理学研究科
氏名	高橋智、上島通浩、安井孝周、頭金正博、肥田重明、熊澤慶伯、雨夜徹
専門分野	公衆衛生、環境科学、衛生化学、生態学

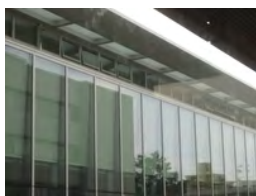


一期生アクティブラーニング発表会

田辺通キャンパスにおける薬学部校舎改築に係る環境対策



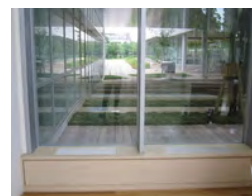
<p>活動の概要</p>	<p>田辺通キャンパスでは、2007年度～2009年度の校舎改築工事以降、以下のような環境対策を実施しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■キャンパスモール(アトリウム)へ自然換気システムと地熱利用のクールチューブを設置し、空調負荷の低減を図っています。 ■キャンパスモール(アトリウム)の窓ガラスに断熱性に優れたペアガラスを採用し、日射負荷の低減対策を実施しています。 ■照明及び誘導灯は高効率型器具を採用し、トイレには照明及び便器・手洗い水栓を自動化・節水型器具を採用しています。 <p>その他、各年度における取組みについては、本学の環境報告書をご覧ください。</p>
<p>活動の時期</p>	<p>2007年度～2009年度以降</p>
<p>関連URL</p>	<p>環境への主な取組み</p>



自然換気システム



室外のクールチューブ(吸込み)



室内のクールチューブ(噴出し)

都市政策研究センター2020年度シンポジウム「SDGsの達成に向けた都市の役割」を開催



活動の概要	<p>「SDGsの達成に向けた都市の役割」をテーマに開催したシンポジウムを2021年1月18日（月）から24日（日）までYouTubeにて配信しました。国際連合地域開発センターの遠藤和重所長による「SDGsと都市の役割」をテーマとした基調講演に続いて、パネルディスカッションでは経済学研究科の鶴飼宏成教授のコーディネートのもと、芸術工学部卒業生でもある株式会社Rebuilding Center JAPANの東野唯史氏、名古屋市総務局長の中田英雄氏、人間文化研究科の伊藤恭彦教授の3名が、産官学のそれぞれの立場からSDGsの推進に向けて議論を交わしました。受講者からは「SDGs推進の経緯と背景、現状を認識した」などの声が寄せられました。</p> <p>※本件は本学広報誌『創新』Vol.39（2021年3月発行）に掲載されました。</p>
活動の時期	2021年1月
関連URL	名古屋市立大学都市政策研究センター2020年度シンポジウム

本学学生がSDGs IDEA FORUM 2020で最優秀賞、優秀賞を受賞！



活動の概要	SDGs達成に向けた名古屋市の地域課題を大学生のアイデアで解決することを目指して開催された「SDGs IDEA FORUM 2020」において、本学から参加した「NCU グローバル・ジャスティス・プロジェクト」（人文社会学部3年・4年）が最優秀賞を、「Act of New Ring」（人文社会学部1年）が優秀賞を獲得しました。 ※学年は2020年度を受賞当時
活動の時期	2021年2月
関連URL	SDGs IDEA FORUM 2020



最優秀賞

NCU グローバル・ジャスティス・プロジェクト
『デポジロウの冒険—プラスチック容器のデポジット新提案』
（人文社会学部3年・4年）
※学年は受賞当時



優秀賞

Act of New Ring
『みんなでつくろう地域の輪～絵本を通して見る世界～』
（人文社会学部1年）
※学年は受賞当時

概要

SDGs

学部学科

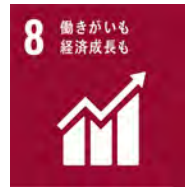
研究科コース

入試

ホーム > SDGs活動紹介 > リニア開発主義の構造と主体—名古屋駅周辺の再編をめぐる開発体制の検証

SDGs活動紹介

リニア開発主義の構造と主体—名古屋駅周辺の再編をめぐる開発体制の検証



担当者	林 浩一郎:人間文化研究科(現代社会学科)、准教授、(専門分野)地域社会学
-----	---------------------------------------

本研究は、名古屋駅周辺における「リニア開発主義」の構造と主体を考察する社会学的研究です。「リニア開発主義」とは、2027年のリニア中央新幹線開通を契機として、経済成長を目指す政治経済システムとそのイデオロギーのことです(林 2020a)。

高度経済成長期のケインズ主義的な「均等発展」という国土開発の建前から、「選択と集中」を志向する新自由主義的な「都市再生」政策へという潮流のなかで、「リニア・インパクト」(江口 2014)に関する考察は喫緊の課題です。リニア開発主義とは、ケインズ主義の開発主義か、新自由主義化された開発主義か、その混合か。リニア開発主義は、名古屋駅周辺にどのようなインパクトを及ぼすのか。「新自由主義化する都市」論(Brenner and Theodore 2002)を批判的に参照し、考察しています。

筆者が、名古屋駅西地区の都市コミュニティを、木田勇輔先生(椋山女学園大学)が名古屋駅周辺の都市政治を、植田剛史先生(愛知大学)が都市空間を調査研究しています(科研費20K02159基盤研究(C)2020~2024年度)。これらにより、名古屋の都市空間をダイナミックに変動させる新たな開発の論理を明らかにします。

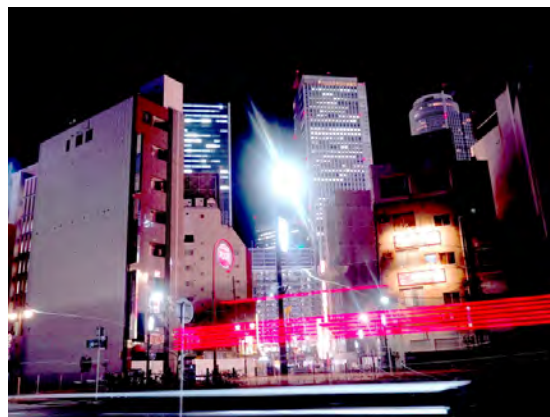
【論文】

林浩一郎,2016,「『リニア・インパクト』を見据えた都市戦略——名古屋駅西側の再編をめぐる『まちづくり体制』の構築」『計画行政と中部』29.

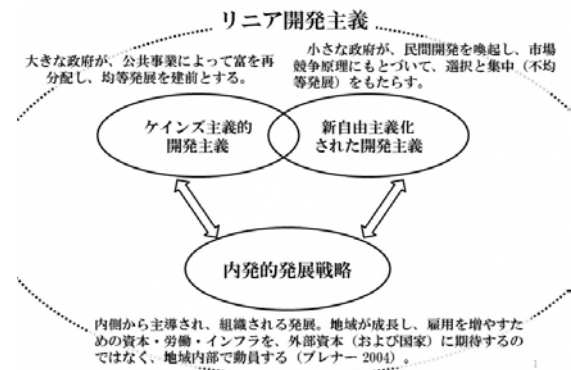
——,2019,「『リニア・インパクト』を見据えた稼ぐまちづくり運動の行方——名古屋駅西側の再編をめぐるエリアリノベーション戦略」『東海社会学年報』11.

——,2020a,「リニア開発主義の構造と主体——名古屋駅西地区におけるリノベーション事業と「草の根」の新自由主義」『日本都市社会学年報』36.(印刷中)

——,2020b,「『都市再生』の社会学——開発主義のなかを生きる」『転換期・名古屋の都市公共政策』ミネルヴァ書房.(印刷中)



リニア開発が迫る名古屋駅西側地区



リニア開発主義の枠組

SDGs活動紹介

名古屋市子どもに関する総合計画への提案と行政職員との意見交換



担当者	谷口由希子:人間文化研究科(心理教育学科)、准教授、(専門分野)社会福祉学
-----	---------------------------------------

本企画は、名古屋市立大学の学生が、名古屋市の子どもの取り巻く課題について、フィールドワークを通して学び、課題と解決策について考察した結果を発表し、名古屋市子ども青少年局長はじめ、行政職員の方と意見交換を行ったものです。

発表を行った学生11名は、フィールドワークに行く前の事前学習として「なごや子ども・子育てわくわくプラン2015—名古屋子どもに関する総合計画—」を学び、地域の課題について考察しました。その結果、フィールドワーク先として、1ひとり親家庭・生活困窮世帯の子どもたちへの学習支援事業、2ひとり親家庭の子どもの居場所づくり事業、3母子生活支援施設、4ひとり親家庭の文化スポーツ交流事業を選定しました。学生は、グループに分かれ、複数回にわたり事業実施先の見学を行い、子どもの支援に関わる実務家からお話を伺いました。これらの学びをもとに学生が議論を重ねた結果を名古屋市に発表することは、学生の社会参画の一環としても期待されます。

<提案のポイント>

- 1居場所事業に子ども食堂の機能を加える:手作りご飯の提供、地域巡回バスを利用した送迎の工夫
- 2学習支援事業の対象を小学生まで広げる
- 3ひとり親家庭の支援コミュニティを作る:ひとり親家庭と支援をしたい人のマッチング、ホームステイ



名市大生が子育て支援策 現場視察し市幹部らに提言

名古屋市が改定手続きを進めている「子どもに関する総合計画」に学生の目線から反映してもらおうと、名古屋市立大学の学生らが市役所を訪れ、フィールドワークを基に立案した子育て支援策を幹部職員らに提案した。

人文社会学部の谷口由希子准教授(社会福祉学)の授業を受講する一年生11人が3グループに分かれ、市の支援事業の現場を視察して提案案をまとめた。

市幹部に提案を提案する学生たち。市役所で

市が試験導入中で、一人親家庭の小中学生を夕方から夜まで預かって学習支援や軽食の提供をする「居場所づくり事業」には、市内に増えている子ども食堂との連携を提案。定期的に親同伴の食事を開き、親子双方の悩みを聞ける態勢づくりの必要性を指摘した。

一人親家庭の中学生を対象にした学習支援事業については、対象を小学生まで引き下げたり、支援内容を

学習だけでなくピアノや書道などの習いごとにも広げたりすることを提案した。

同計画は、なごや子ども条例に基づいて市が5年間で進める子どもや若者、子育て家庭への支援策の大方針がまとめであり、2015年度に策定。現在は2020年度から新たな5年間の計画への改定が進んでいる。

学生から提案を聞き取った市子ども青少年局長の海野検博局長は「計画の当事者世代である皆さんが現場を直接見て、感じ取った貴重な意見。ぜひ参考にさせていただきます」と話した。

(谷悠己)



Goal 12

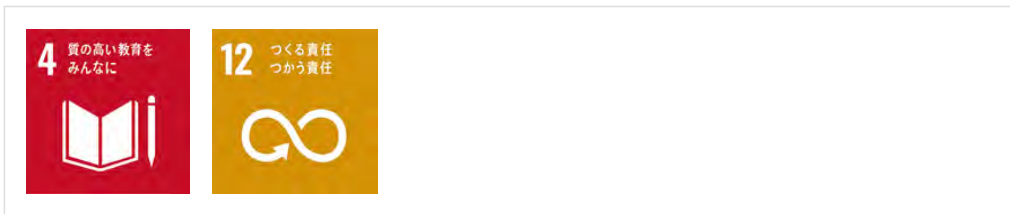


2020年度 グリーン購入の推進、廃棄物の減量化及びリサイクル資源の活用



活動の概要	<p>(1) 2020年度の廃棄物の減量化及びリサイクル資源の活用</p> <p>【不要物品等の有効活用】 各所属にて不要物品が出た場合は、再利用できる旨を学内へ周知して再使用希望者を募集しており、不要物品の有効活用を継続して実施しています。</p> <p>【古紙、びん、缶、ペットボトルの資源化率】 資源化率 100%を継続することができました。</p> <p>【ペットボトルキャップの回収】 ペットボトルキャップの再資源化を通じて、廃棄物の減量化とリサイクル資源の活用を推進しています。</p> <p>2020年度は4キャンパスの事務室、学生会館等で回収を行い、約90 kgのペットボトルキャップを回収業者へ送ることができました。回収されたペットボトルキャップは、回収業者において再資源化され、得られた利益によって発展途上国の子どもたちにワクチンが送られます。2020年度は、45名分のワクチンを送ることができました。</p> <p>(2) 2020年度のグリーン購入の推進 本学では、名古屋市グリーン購入推進指針及び名古屋市グリーン購入ガイドラインに基づき、環境に配慮した製品の選定に努めています。</p>
活動の時期	2020年度実績
関連URL	環境報告書2020

2020年度 学生の環境に関する活動への支援



活動の概要	<p>学生の自治組織である名古屋市立大学学友会は、2011年に環境に配慮して行動することを宣言しています。この宣言に基づき、2020年度も学生の自主的な活動である課外活動や大学祭において、学生のアイディアによる環境保全の取り組み（開学記念日一斉清掃の実施や大学祭でのエコステーションの設置など）の支援を計画していました。</p> <p>しかし、新型コロナウイルス感染症により、学生の自主的な活動の実施形態が大きく影響を受けたため、当初の大学祭、課外活動での環境に関する取り組みを支援する計画を変更し、環境に関するオンラインイベントの参加促進を行いました。</p> <p>また、国際的な共同研究・支援活動として、世界の食糧生産と分配の改善と生活向上や生物多様性を目的とした国連食糧農業機関（FAO）でのインターンシップに関する協定を締結しています。</p>
活動の時期	2020年度
関連URL	環境報告書2020

2020年度 環境に関連した地域社会等との連携



<p>活動の概要</p>	<p>【環境に関連したテーマの講座等の開催】 名古屋市科学館との連携により、中高生向けに、サイエンスパートナーシップイベント「物質科学と生命科学のリテラシー」を開催し、物質科学と生命科学の魅力を紹介しました。 Zoomによるオンライン配信で、サイエンスカフェ in 名古屋 第154回「スコープで探る未知の世界～波打ち際で爆発的に進化したハゼたち～」を開催し、高校・中学校の生徒13名・教員2名を対象にハゼ類の生態を通して、環境保全の課題に関する講演を行いました。 また、名古屋市環境局なごや生物多様性センターと共同で「なごや生物多様性シンポジウム～みんなをつなぐ生物多様性の未来～」を開催し、理学研究科附属生物多様性研究センターからの研究報告を行ったほか、専門家と県下8高校の高校生とのトークセッションなどを通じて、生物多様性の普及啓発を行いました。</p> <p>【市民と共に生物調査を行うイベントの開催】 市民とともに名古屋市内の全区で生物調査を行うイベント「なごや生きもの一斉調査2020 バッタ編」(2020年10月2日～4日)で、理学研究科生物多様性研究センターのスタッフ2名が調査の地点リーダーを務めるとともに、理学研究科・総合生命理学部の学生3名が一般調査員として参加しました。</p> <p>【名古屋市スポーツ市民局の消費者啓発事業との連携協力】 名古屋市スポーツ市民局の消費者啓発事業に、人文社会学部の学生がゼミ活動として連携協力し、その一環で2021年1月18日～3月31日までオンラインで開催された「名古屋市消費生活フェア☆2020 オンライン展示会」でパネル展示を行いました。 プラスチックにかわる素材としてセルロースを使ったマスクと食品保存用ラップの提案や、使い捨てプラスチック容器を回収する方法としてのデポジット制に関するパンフレット制作や社会実験の成果をパネルで発表しました。</p>
<p>活動の時期</p>	<p>2020年度実績</p>
<p>関連URL</p>	<p>環境報告書2020</p>

2020年度 環境負荷低減のための省エネルギー・省資源の取り組み



活動の概要	<p>(1) 2020年度の環境負荷低減のための省エネルギー・省資源の取り組み 省エネ法（エネルギーの使用の合理化等に関する法律）に基づき、川澄キャンパスは第一種エネルギー管理指定工場等に指定されており、省エネルギー推進委員会を置いてエネルギー使用量の削減に取り組んでいます。</p> <p>【エネルギー使用量】 2020年度の大学全体のエネルギー使用量は、電気約 34,204 千 kWh、ガス約 3,993 千 m³、水道約 291 千 m³となりました。対前年度比では、電気使用量は約 3.6%の削減、水道使用量は約 1.4%の削減となりました。</p> <p>【温室効果ガスの排出量】 2020年度の温室効果ガス排出量は 25,711 t-CO₂ となり、前年度より 1.4%低い値となりました。</p> <p>(2) 2020年度のその他の環境負荷低減のための省エネルギー・省資源の取り組み 【地球温暖化対策実施状況の報告】 名古屋市の「市民の健康と安全を確保する環境の保全に関する条例」（環境保全条例）に基づき、温室効果ガスの排出量等を、地球温暖化対策実施状況書により名古屋市に報告しています。また、本学ウェブサイトにおいても、実施状況報告書・計画書を公開しております。</p> <p>【省エネ法定期報告に基づく事業者クラス分け評価】 本学は、エネルギーの使用の合理化等に関する法律（省エネ法）に基づき、経済産業省中部経済産業局に対し、エネルギー使用状況等に関する定期報告を行っています。</p> <p>事業者クラス分け評価制度は、定期報告を評価し、提出する全ての事業者を S・A・B・C の 4 段階へクラス分けするものですが、本学は 2015 年度実績より毎年度 S クラス（省エネが優良な事業者）の評価を得ています。</p>
活動の時期	2020年度実績
関連URL	環境報告書2020

2020年度 地球温暖化対策計画書・実施状況書の作成



活動の概要	<p>名古屋市では、「市民の健康と安全を確保する環境の保全に関する条例」に基づき、事業活動における地球温暖化防止への自主的な取組みを促進することを目的に、一定規模以上の事業者は「地球温暖化対策計画書」を届け出ることを定めています。また、毎年度、地球温暖化対策の実施状況を届け出ることとなっております。</p> <p>本学も、名古屋市の「市民の健康と安全を確保する環境の保全に関する条例」に基づき、地球温暖化対策計画書及び地球温暖化対策実施状況書を作成し、本学WEBサイト上で公開しています。</p>
活動の時期	2020年度実績
関連URL	環境報告書2020

国費留学優先配置(特別枠)事業「環境健康安全学」プログラム



活動の概要	主に東南アジア諸国の①海外拠点校②大学間交流協定校から選抜された国費留学生に加え、本学の医学研究科、薬学研究科、理学研究科に入学した私費留学生と日本人学生が、「環境健康安全学」に関連した教育と研究を協働して行います。このプログラムでは、通常的环境健康安全学に関連する講義科目の受講および研究に従事することに加えて、グローバルレベルでのSDGsに関連した課題について議論し解決策を提示するアクティブラーニングやSDGs関連機関でのインターンシップを行うなどの特色があります。
活動の時期	2020年度～2026年度
関連URL	MEXT scholarship 国際交流・留学 名古屋市立大学 (nagoya-cu.ac.jp)
期待される効果、今後の展望	このプログラムで学んだSDGsに関連する知識や経験を元に、プログラム受講生は東南アジア地域等でのSDGs関連のリーダーになることが期待されています。また、このプログラムの履修を通じて培われた人脈は、グローバルレベルでのSDGs課題解決に役立つことも期待されています。
所属	医学研究科、薬学研究科、理学研究科
氏名	高橋智、上島通浩、安井孝周、頭金正博、肥田重明、熊澤慶伯、雨夜徹
専門分野	公衆衛生、環境科学、衛生化学、生態学

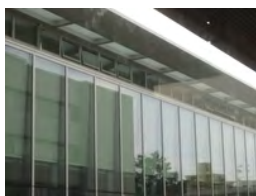


一期生アクティブラーニング発表会

田辺通キャンパスにおける薬学部校舎改築に係る環境対策



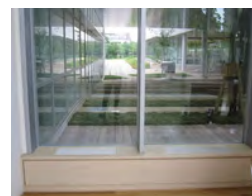
<p>活動の概要</p>	<p>田辺通キャンパスでは、2007年度～2009年度の校舎改築工事以降、以下のような環境対策を実施しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■キャンパスモール(アトリウム)へ自然換気システムと地熱利用のクールチューブを設置し、空調負荷の低減を図っています。 ■キャンパスモール(アトリウム)の窓ガラスに断熱性に優れたペアガラスを採用し、日射負荷の低減対策を実施しています。 ■照明及び誘導灯は高効率型器具を採用し、トイレには照明及び便器・手洗い水栓を自動化・節水型器具を採用しています。 <p>その他、各年度における取組みについては、本学の環境報告書をご覧ください。</p>
<p>活動の時期</p>	<p>2007年度～2009年度以降</p>
<p>関連URL</p>	<p>環境への主な取組み</p>



自然換気システム

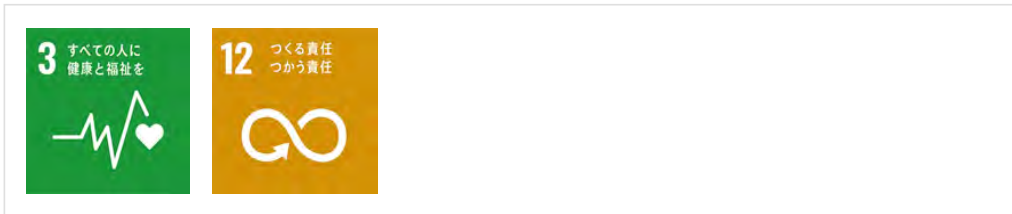


室外のクールチューブ(吸込み)



室内のクールチューブ(噴出し)

透明な銅フィルムを用いた普遍的かつ持続可能な感染対策の開発



活動の概要	新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)のパンデミックにより、感染対策は医療現場に限らず、日常生活でも大きな課題となっています。抗ウイルス薬の開発は難しく、相次ぐ変異株や薬剤耐性にも対応する普遍的な抗ウイルス対策が求められています。私たちは、医療現場において多剤耐性菌による院内感染の予防対策として、銅の強い抗微生物作用に着目してきました。そして、これまでの産学共同研究により透明な銅フィルムを世界で初めて開発し、その強い抗菌作用を証明しました。これまでに透明な銅フィルムを用いたフェイスシールドやキーボードカバーなどを開発し、臨床応用しています。
活動の時期	2020年 論文発表 2020年 透明な銅フィルムを用いたフェイスシールドを開発。成果物を大学病院と大規模ワクチン接種会場へ寄付。
関連URL	株式会社UACJ リリース・お知らせ
researchmap URL	https://researchmap.jp/ncu-er.jp
関連する論文	Novel transparent copper film with antibacterial activity for environmental infection control. Matsushima A, Shibata S, Ohara H. Acute Med Surg. 2020; 7 : e543.
期待される効果、今後の展望	銅フィルムは安価であることから、医療現場から日常生活まで幅広く利用されることが期待されます。多剤耐性菌とともに新型コロナウイルスや今後も起こり得る新興感染症に対して、普遍的かつ持続可能な感染対策の開発につながる研究です。
所属	医学研究科 救命救急医療学
氏名	松嶋 麻子
専門分野	救急医学



アルミフレームと組み合わせたフェイスシールド



パソコン用キーボードカバー

本学学生がSDGs IDEA FORUM 2020で最優秀賞、優秀賞を受賞！



活動の概要	SDGs達成に向けた名古屋市の地域課題を大学生のアイデアで解決することを目指して開催された「SDGs IDEA FORUM 2020」において、本学から参加した「NCU グローバル・ジャスティス・プロジェクト」（人文社会学部3年・4年）が最優秀賞を、「Act of New Ring」（人文社会学部1年）が優秀賞を獲得しました。 ※学年は2020年度を受賞当時
活動の時期	2021年2月
関連URL	SDGs IDEA FORUM 2020



最優秀賞

NCU グローバル・ジャスティス・プロジェクト
『デポジロウの冒険—プラスチック容器のデポジット新提案』
（人文社会学部3年・4年）
※学年は受賞当時



優秀賞

Act of New Ring
『みんなでつくろう地域の輪～絵本を通して見る世界～』
（人文社会学部1年）
※学年は受賞当時

Goal 13



2020年度 環境に関連した地域社会等との連携



<p>活動の概要</p>	<p>【環境に関連したテーマの講座等の開催】 名古屋市科学館との連携により、中高生向けに、サイエンスパートナーシップイベント「物質科学と生命科学のリテラシー」を開催し、物質科学と生命科学の魅力を紹介しました。 Zoomによるオンライン配信で、サイエンスカフェ in 名古屋 第154回「スコープで探る未知の世界～波打ち際で爆発的に進化したハゼたち～」を開催し、高校・中学校の生徒13名・教員2名を対象にハゼ類の生態を通して、環境保全の課題に関する講演を行いました。 また、名古屋市環境局なごや生物多様性センターと共同で「なごや生物多様性シンポジウム～みんなをつなぐ生物多様性の未来～」を開催し、理学研究科附属生物多様性研究センターからの研究報告を行ったほか、専門家と県下8高校の高校生とのトークセッションなどを通じて、生物多様性の普及啓発を行いました。</p> <p>【市民と共に生物調査を行うイベントの開催】 市民とともに名古屋市内の全区で生物調査を行うイベント「なごや生きもの一斉調査2020 バッタ編」(2020年10月2日～4日)で、理学研究科生物多様性研究センターのスタッフ2名が調査の地点リーダーを務めるとともに、理学研究科・総合生命理学部の学生3名が一般調査員として参加しました。</p> <p>【名古屋市スポーツ市民局の消費者啓発事業との連携協力】 名古屋市スポーツ市民局の消費者啓発事業に、人文社会学部の学生がゼミ活動として連携協力し、その一環で2021年1月18日～3月31日までオンラインで開催された「名古屋市消費生活フェア☆2020 オンライン展示会」でパネル展示を行いました。 プラスチックにかわる素材としてセルロースを使ったマスクと食品保存用ラップの提案や、使い捨てプラスチック容器を回収する方法としてのデポジット制に関するパンフレット制作や社会実験の成果をパネルで発表しました。</p>
<p>活動の時期</p>	<p>2020年度実績</p>
<p>関連URL</p>	<p>環境報告書2020</p>

2020年度 環境問題への理解を深める教育の推進



<p>活動の概要</p>	<p>本学では、教養教育及び専門教育科目において、環境問題及びその周辺の諸課題を認識し、自ら解決方法を考えさせることを目標とした科目を開講しています。</p> <p>また、全学共通の教養教育科目においては、全学部生が履修できるよう、教養教育の環境関連の科目15科目を開講し、環境問題への理解と関心を深めるようにしています。</p> <p>学部専門教育科目において、授業科目「ESD 概論」では、気候変動や生物多様性の損失をはじめとする環境問題が、自らの生活と密接に結びついていることに気づき、どうしたら持続可能な地球環境の保全に取り組めるのかを身近な地域課題を取りあげながら検討し、実行しています。</p> <p>さらに、大学院教育においても、環境問題について様々な学問的手法による分析、現地調査などによる研究を取り入れた授業科目が提供されています。「建築設備設計特論」では、日本を含む世界のエネルギー消費事情と政策動向を概観し、地球環境と建築とのかかわりを知ることで、未来を担う一人ひとりがその責務を認知し行動に移すことを目指しており、この授業を通して、建築設計のなかで実現できる省エネ・環境負荷手法について理解でき、建築設計者として取り組める環境配慮策を身につけます。</p>
<p>活動の時期</p>	<p>2020年度</p>
<p>関連URL</p>	<p>環境報告書2020</p>

2020年度 地球温暖化対策計画書・実施状況書の作成



活動の概要	<p>名古屋市では、「市民の健康と安全を確保する環境の保全に関する条例」に基づき、事業活動における地球温暖化防止への自主的な取組みを促進することを目的に、一定規模以上の事業者は「地球温暖化対策計画書」を届け出ることを定めています。また、毎年度、地球温暖化対策の実施状況を届け出ることとなっております。</p> <p>本学も、名古屋市の「市民の健康と安全を確保する環境の保全に関する条例」に基づき、地球温暖化対策計画書及び地球温暖化対策実施状況書を作成し、本学WEBサイト上で公開しています。</p>
活動の時期	2020年度実績
関連URL	環境報告書2020

国費留学優先配置(特別枠)事業「環境健康安全学」プログラム



活動の概要	主に東南アジア諸国の①海外拠点校②大学間交流協定校から選抜された国費留学生に加え、本学の医学研究科、薬学研究科、理学研究科に入学した私費留学生と日本人学生が、「環境健康安全学」に関連した教育と研究を協働して行います。このプログラムでは、通常的环境健康安全学に関連する講義科目の受講および研究に従事することに加えて、グローバルレベルでのSDGsに関連した課題について議論し解決策を提示するアクティブラーニングやSDGs関連機関でのインターンシップを行うなどの特色があります。
活動の時期	2020年度～2026年度
関連URL	MEXT scholarship 国際交流・留学 名古屋市立大学 (nagoya-cu.ac.jp)
期待される効果、今後の展望	このプログラムで学んだSDGsに関連する知識や経験を元に、プログラム受講生は東南アジア地域等でのSDGs関連のリーダーになることが期待されています。また、このプログラムの履修を通じて培われた人脈は、グローバルレベルでのSDGs課題解決に役立つことも期待されています。
所属	医学研究科、薬学研究科、理学研究科
氏名	高橋智、上島通浩、安井孝周、頭金正博、肥田重明、熊澤慶伯、雨夜徹
専門分野	公衆衛生、環境科学、衛生化学、生態学

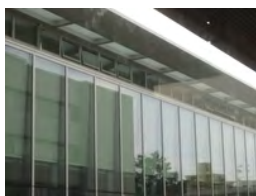


一期生アクティブラーニング発表会

田辺通キャンパスにおける薬学部校舎改築に係る環境対策



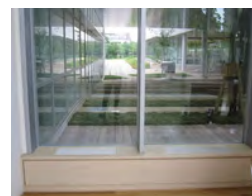
<p>活動の概要</p>	<p>田辺通キャンパスでは、2007年度～2009年度の校舎改築工事以降、以下のような環境対策を実施しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■キャンパスモール(アトリウム)へ自然換気システムと地熱利用のクールチューブを設置し、空調負荷の低減を図っています。 ■キャンパスモール(アトリウム)の窓ガラスに断熱性に優れたペアガラスを採用し、日射負荷の低減対策を実施しています。 ■照明及び誘導灯は高効率型器具を採用し、トイレには照明及び便器・手洗い水栓を自動化・節水型器具を採用しています。 <p>その他、各年度における取組みについては、本学の環境報告書をご覧ください。</p>
<p>活動の時期</p>	<p>2007年度～2009年度以降</p>
<p>関連URL</p>	<p>環境への主な取組み</p>



自然換気システム



室外のクールチューブ(吸込み)



室内のクールチューブ(噴出し)

Goal 14



2020年度 環境問題への理解を深める教育の推進



活動の概要	<p>本学では、教養教育及び専門教育科目において、環境問題及びその周辺の諸課題を認識し、自ら解決方法を考えさせることを目標とした科目を開講しています。</p> <p>また、全学共通の教養教育科目においては、全学部生が履修できるよう、教養教育の環境関連の科目15科目を開講し、環境問題への理解と関心を深めるようにしています。</p> <p>学部専門教育科目において、授業科目「ESD 概論」では、気候変動や生物多様性の損失をはじめとする環境問題が、自らの生活と密接に結びついていることに気づき、どうしたら持続可能な地球環境の保全に取り組めるのかを身近な地域課題を取りあげながら検討し、実行しています。</p> <p>さらに、大学院教育においても、環境問題について様々な学問的手法による分析、現地調査などによる研究を取り入れた授業科目が提供されています。「建築設備設計特論」では、日本を含む世界のエネルギー消費事情と政策動向を概観し、地球環境と建築とのかかわりを知ることで、未来を担う一人ひとりがその責務を認知し行動に移すことを目指しており、この授業を通して、建築設計のなかで実現できる省エネ・環境負荷手法について理解でき、建築設計者として取り組める環境配慮策を身につけます。</p>
活動の時期	2020年度
関連URL	環境報告書2020

国費留学優先配置(特別枠)事業「環境健康安全学」プログラム



活動の概要	主に東南アジア諸国の①海外拠点校②大学間交流協定校から選抜された国費留学生に加え、本学の医学研究科、薬学研究科、理学研究科に入学した私費留学生と日本人学生が、「環境健康安全学」に関連した教育と研究を協働して行います。このプログラムでは、通常的环境健康安全学に関連する講義科目の受講および研究に従事することに加えて、グローバルレベルでのSDGsに関連した課題について議論し解決策を提示するアクティブラーニングやSDGs関連機関でのインターンシップを行うなどの特色があります。
活動の時期	2020年度～2026年度
関連URL	MEXT scholarship 国際交流・留学 名古屋市立大学 (nagoya-cu.ac.jp)
期待される効果、今後の展望	このプログラムで学んだSGSに関連する知識や経験を元に、プログラム受講生は東南アジア地域等でのSDGs関連のリーダーになることが期待されています。また、このプログラムの履修を通じて培われた人脈は、グローバルレベルでのSDGs課題解決に役立つことも期待されています。
所属	医学研究科、薬学研究科、理学研究科
氏名	高橋智、上島通浩、安井孝周、頭金正博、肥田重明、熊澤慶伯、雨夜徹
専門分野	公衆衛生、環境科学、衛生化学、生態学



一期生アクティブラーニング発表会

動物園飼育下の大型類人猿人工繁殖と遠隔診療ネットワークの構築



活動の概要	<p>オランウータンメス個体の生体活性物質の月経周期における変化を排卵の予知に応用する可能性を検討し、ヒトの精子調整法をオランウータンの精液で検討しました。その結果、千葉動物公園に2回のオランウータンの人工授精を遂行しました。</p> <p>ヒトにおける“人間ドック”に相当する健康診断や診療を動物園飼育下の大型類人猿に応用しました。インターネットを利用した遠隔診療システムを構築し、迅速な診断と早期治療を可能にしました。</p>
活動の時期	論文発表：2019年、2020年、2021年
関連URL	<p>千葉県動物公園WEBサイト</p> <p>京都大学霊長類研究所 年報</p> <p>ボルネオオランウータンとチンパンジーの精液液状部および凝固部における精子運動性を比較</p>
researchmap URL	https://researchmap.jp/yasuhikoozaki
関連する論文	<p>1, Urinary sex steroid hormone and placental leucine Aminopeptidase concentration differences between live births and stillbirth of Bornean orangutans (<i>Pongo pygmaeus</i>), Kinoshita K, Sano Y, Takai A, Shimizu M, Kobayashi T, Ouchi A, Kuze N, InoueMurayama M, Idani G, Okamoto M, Ozaki Y. <i>Journal of Medical Primatology</i>, 46 (1), 3-8, 2017.</p> <p>2, Seminal characteristics of great apes possessing seminal coagulum: Bornean orangutan (<i>Pongo pygmaeus</i>) and chimpanzee (<i>Pan troglodytes</i>), Kinoshita K, Indo Y, Tajima T, Kuze N, Miyakawa E, Kobayashi T, Nakamura T, Ogata M, Okumura F, Hayakawa T, Morimura N, Mori Y, Okamoto M, Ozaki Y, Hirata S. <i>Scientific Reports</i>, 2019.</p> <p>3, Gynaecological diagnosis by ultrasound and the measurement of urinary sex steroid hormone in female orangutans (<i>Pongo spp.</i>), Kinoshita K, Nakamura T, Kimura K, Shimizu M, Kuze N, Ozaki Y., <i>Vet Med Sci</i>. 2020;00:1-5.</p> <p>4, Comparative analysis of sperm motility in liquid and seminal coagulum portions between Bornean orangutan (<i>Pongopygmaeus</i>) and chimpanzee (<i>Pan troglodytes</i>). Kinoshita K, Indo Y, Tajima T, Kuze N, Miyakawa E, Kobayashi T, Nakamura T, Ogata M, Okumura F, Hayakawa T, Morimura N, Mori Y, Okamoto M, Ozaki Y, Hirata S. <i>Primates</i>. 2021 May;62(3):467-473.</p>
期待される効果、今後の展望	<p>現在ヒトで行われている生殖医療、不妊治療や周産期医療を人工飼育下の類人猿繁殖計画に応用します。またヒトの健康診断システムや治療法を動物に適応させるという独創的な本研究は“人と動物と環境に優しい名古屋市立大学”として生物学、獣医学や環境学との異分野融合型研究を展開することが期待されます。数多くの貴重な動物の命の犠牲のもとに発展して来たヒトの医療を動物たちに還元することが本研究のメインコンセプトです。</p>
所属	名古屋市立大学医学部附属西部医療センター産婦人科
氏名	尾崎 康彦
専門分野	産婦人科学、生殖免疫学、周産期医学



ニシローランドゴリラの婦人科検査（経膈超音波・頸部細胞診）
2019年 恩賜上野動物園



ニシローランドゴリラの婦人科検査（CT読影）
2019年 恩賜上野動物園

本学学生がSDGs IDEA FORUM 2020で最優秀賞、優秀賞を受賞！



活動の概要	SDGs達成に向けた名古屋市の地域課題を大学生のアイデアで解決することを目指して開催された「SDGs IDEA FORUM 2020」において、本学から参加した「NCU グローバル・ジャスティス・プロジェクト」（人文社会学部3年・4年）が最優秀賞を、「Act of New Ring」（人文社会学部1年）が優秀賞を獲得しました。 ※学年は2020年度を受賞当時
活動の時期	2021年2月
関連URL	SDGs IDEA FORUM 2020



最優秀賞

NCU グローバル・ジャスティス・プロジェクト
『デポジロウの冒険—プラスチック容器のデポジット新提案』
（人文社会学部3年・4年）
※学年は受賞当時



優秀賞

Act of New Ring
『みんなでつくろう地域の輪～絵本を通して見る世界～』
（人文社会学部1年）
※学年は受賞当時

Goal 15



2020年度 環境に関連した地域社会等との連携



<p>活動の概要</p>	<p>【環境に関連したテーマの講座等の開催】</p> <p>名古屋市科学館との連携により、中高生向けに、サイエンスパートナーシップイベント「物質科学と生命科学のリテラシー」を開催し、物質科学と生命科学の魅力を紹介しました。</p> <p>Zoom によるオンライン配信で、サイエンスカフェ in 名古屋 第 154 回「スコープで探る未知の世界～波打ち際に爆発的に進化したハゼたち～」を開催し、高校・中学校の生徒13名・教員2名を対象にハゼ類の生態を通して、環境保全の課題に関する講演を行いました。</p> <p>また、名古屋市環境局なごや生物多様性センターと共同で「なごや生物多様性シンポジウム～みんなでつなぐ生物多様性の未来～」を開催し、理学研究科附属生物多様性研究センターからの研究報告を行ったほか、専門家と県下 8 高校の高校生とのトークセッションなどを通じて、生物多様性の普及啓発を行いました。</p> <p>【市民と共に生物調査を行うイベントの開催】</p> <p>市民とともに名古屋市内の全区で生物調査を行うイベント「なごや生きもの一斉調査 2020 バッタ編」（2020年10月2日～4日）で、理学研究科生物多様性研究センターのスタッフ 2名が調査の地点リーダーを務めるとともに、理学研究科・総合生命理学部の学生 3名が一般調査員として参加しました。</p> <p>【名古屋市スポーツ市民局の消費者啓発事業との連携協力】</p> <p>名古屋市スポーツ市民局の消費者啓発事業に、人文社会学部の学生がゼミ活動として連携協力し、その一環で2021年1月 18 日～3月 31 日までオンラインで開催された「名古屋市消費生活フェア☆2020 オンライン展示会」でパネル展示を行いました。</p> <p>プラスチックにかわる素材としてセルロースを使ったマスクと食品保存用ラップの提案や、使い捨てプラスチック容器を回収する方法としてのデポジット制に関するパンフレット制作や社会実験の成果をパネルで発表しました。</p>
<p>活動の時期</p>	<p>2020年度実績</p>
<p>関連URL</p>	<p>環境報告書2020</p>

2020年度 環境問題への理解を深める教育の推進



活動の概要	<p> 本学では、教養教育及び専門教育科目において、環境問題及びその周辺の諸課題を認識し、自ら解決方法を考えさせることを目標とした科目を開講しています。 </p> <p> また、全学共通の教養教育科目においては、全学部生が履修できるよう、教養教育の環境関連の科目15科目を開講し、環境問題への理解と関心を深めるようにしています。 </p> <p> 学部専門教育科目において、授業科目「ESD 概論」では、気候変動や生物多様性の損失をはじめとする環境問題が、自らの生活と密接に結びついていることに気づき、どうしたら持続可能な地球環境の保全に取り組めるのかを身近な地域課題を取りあげながら検討し、実行しています。 </p> <p> さらに、大学院教育においても、環境問題について様々な学問的手法による分析、現地調査などによる研究を取り入れた授業科目が提供されています。「建築設備設計特論」では、日本を含む世界のエネルギー消費事情と政策動向を概観し、地球環境と建築とのかかわりを知ることで、未来を担う一人ひとりがその責務を認知し行動に移すことを目指しており、この授業を通して、建築設計のなかで実現できる省エネ・環境負荷手法について理解でき、建築設計者として取り組める環境配慮策を身につけます。 </p>
活動の時期	2020年度
関連URL	環境報告書2020

2020年度 生物多様性の保全に関連する学術研究等の推進



活動の概要	<p>① 生物多様性研究センターを中心とした生物多様性の保全に関連する研究の実施 理学研究科では、名古屋周辺に生息する貝類の進化多様性について分子系統解析を行った研究成果を4編の学術論文にまとめるとともに、名古屋市内で絶滅が危惧されているカエル類や名市大滝子キャンパス構内の小動物等についてDNA分析を行い、陸の豊かさを守るために必要な生物多様性情報を取得しました。</p> <p>また、なごや生物多様性シンポジウム～みんなでつなぐ生物多様性の未来～を、名古屋市環境局なごや生物多様性センターと共同開催し、生物多様性研究センターでこれまで行ってきた研究の成果を市民に分かりやすく伝えるとともに、愛知県内の8高校の生徒たちと生物多様性保全活動の今後の方向性について有意義な議論を行いました。</p> <p>② 環境分野に係る外部研究資金獲得に向けて公募情報を発信するなど研究支援の実施 環境分野に係る外部研究資金獲得に向けて公募情報を発信するなど、研究支援を行いました。</p> <p><公募情報の発信実績></p> <ul style="list-style-type: none">・総合地球環境学研究所研究プロジェクト・一般財団法人藤森科学技術振興財団研究助成・公益財団法人八洲環境技術振興財団研究助成・公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団環境プロジェクト助成 など計6件
活動の時期	2020年度実績
関連URL	環境報告書2020

国費留学優先配置(特別枠)事業「環境健康安全学」プログラム



活動の概要	主に東南アジア諸国の①海外拠点校②大学間交流協定校から選抜された国費留学生に加え、本学の医学研究科、薬学研究科、理学研究科に入学した私費留学生と日本人学生が、「環境健康安全学」に関連した教育と研究を協働して行います。このプログラムでは、通常的环境健康安全学に関連する講義科目の受講および研究に従事することに加えて、グローバルレベルでのSDGsに関連した課題について議論し解決策を提示するアクティブラーニングやSDGs関連機関でのインターンシップを行うなどの特色があります。
活動の時期	2020年度～2026年度
関連URL	MEXT scholarship 国際交流・留学 名古屋市立大学 (nagoya-cu.ac.jp)
期待される効果、今後の展望	このプログラムで学んだSDGsに関連する知識や経験を元に、プログラム受講生は東南アジア地域等でのSDGs関連のリーダーになることが期待されています。また、このプログラムの履修を通じて培われた人脈は、グローバルレベルでのSDGs課題解決に役立つことも期待されています。
所属	医学研究科、薬学研究科、理学研究科
氏名	高橋智、上島通浩、安井孝周、頭金正博、肥田重明、熊澤慶伯、雨夜徹
専門分野	公衆衛生、環境科学、衛生化学、生態学



一期生アクティブラーニング発表会

動物園飼育下の大型類人猿人工繁殖と遠隔診療ネットワークの構築



活動の概要	<p>オランウータンメス個体の生体活性物質の月経周期における変化を排卵の予知に応用する可能性を検討し、ヒトの精子調整法をオランウータンの精液で検討しました。その結果、千葉動物公園に2回のオランウータンの人工授精を遂行しました。</p> <p>ヒトにおける“人間ドック”に相当する健康診断や診療を動物園飼育下の大型類人猿に応用しました。インターネットを利用した遠隔診療システムを構築し、迅速な診断と早期治療を可能にしました。</p>
活動の時期	論文発表：2019年、2020年、2021年
関連URL	<p>千葉県動物公園WEBサイト</p> <p>京都大学霊長類研究所 年報</p> <p>ボルネオオランウータンとチンパンジーの精液液状部および凝固部における精子運動性を比較</p>
researchmap URL	https://researchmap.jp/yasuhikoozaki
関連する論文	<p>1, Urinary sex steroid hormone and placental leucine Aminopeptidase concentration differences between live births and stillbirth of Bornean orangutans (<i>Pongo pygmaeus</i>), Kinoshita K, Sano Y, Takai A, Shimizu M, Kobayashi T, Ouchi A, Kuze N, InoueMurayama M, Idani G, Okamoto M, Ozaki Y. <i>Journal of Medical Primatology</i>, 46 (1), 3-8, 2017.</p> <p>2, Seminal characteristics of great apes possessing seminal coagulum: Bornean orangutan (<i>Pongo pygmaeus</i>) and chimpanzee (<i>Pan troglodytes</i>), Kinoshita K, Indo Y, Tajima T, Kuze N, Miyakawa E, Kobayashi T, Nakamura T, Ogata M, Okumura F, Hayakawa T, Morimura N, Mori Y, Okamoto M, Ozaki Y, Hirata S. <i>Scientific Reports</i>, 2019.</p> <p>3, Gynaecological diagnosis by ultrasound and the measurement of urinary sex steroid hormone in female orangutans (<i>Pongo spp.</i>), Kinoshita K, Nakamura T, Kimura K, Shimizu M, Kuze N, Ozaki Y., <i>Vet Med Sci</i>. 2020;00:1-5.</p> <p>4, Comparative analysis of sperm motility in liquid and seminal coagulum portions between Bornean orangutan (<i>Pongopygmaeus</i>) and chimpanzee (<i>Pan troglodytes</i>). Kinoshita K, Indo Y, Tajima T, Kuze N, Miyakawa E, Kobayashi T, Nakamura T, Ogata M, Okumura F, Hayakawa T, Morimura N, Mori Y, Okamoto M, Ozaki Y, Hirata S. <i>Primates</i>. 2021 May;62(3):467-473.</p>
期待される効果、今後の展望	<p>現在ヒトで行われている生殖医療、不妊治療や周産期医療を人工飼育下の類人猿繁殖計画に応用します。またヒトの健康診断システムや治療法を動物に適応させるという独創的な本研究は“人と動物と環境に優しい名古屋市立大学”として生物学、獣医学や環境学との異分野融合型研究を展開することが期待されます。数多くの貴重な動物の命の犠牲のもとに発展して来たヒトの医療を動物たちに還元することが本研究のメインコンセプトです。</p>
所属	名古屋市立大学医学部附属西部医療センター産婦人科
氏名	尾崎 康彦
専門分野	産婦人科学、生殖免疫学、周産期医学



ニシローランドゴリラの婦人科検査（経膈超音波・頸部細胞診）
2019年 恩賜上野動物園



ニシローランドゴリラの婦人科検査（CT読影）
2019年 恩賜上野動物園

Goal 16

16 平和と公正を
すべての人に



保健NGOとの連携



活動の概要	<p>一般社団法人Bridges in Public Health (BiPH) は、知づくり、場づくり、人づくりを通して、科学と社会、専門職と一般の人びと、地域と世界をつないでHealth for AllをめざすNGOです。BiPHを設立し、代表をつとめています。</p> <p>現在は、東ティモールでのJICA草の根技術協力事業の実施、コミュニティ活動のための書籍の翻訳、定期勉強会の開催などが主な活動です。</p> <p>勉強会共催、インターン受け入れ、草の根技術協力事業のカウンターパートとの共同研究など、本学の教育、研究との連携を行っています。</p>
活動の時期	継続中（2022年2月現在）
関連URL	<p>一般社団法人Bridges in Public Health WEBサイト</p> <p>一般社団法人Bridges in Public Health Facebookページ</p>
researchmap URL	https://researchmap.jp/read0145307
関連する論文	- Kyoko Sasaki. Associations between Infant and Young Child Feeding (IYCF) practice and attitudes toward intimate partner violence (IPV) in Timor-Leste. Nagoya: Nagoya City University Graduate School of Nursing (Master thesis); 2022.
期待される効果、今後の展望	<p>JICA草の根技術協力プロジェクトでは、住民の健康ニーズを的確に把握できる人材の育成を実施中です。また、プロジェクトと橋渡しした大学院生の修士論文は、投稿準備中です。</p> <p>Helping Health Workers Learnの翻訳は5月ごろ発刊予定です。保健関係者だけではなく、コミュニティで活動している人びとに活用してもらえるようなしなかけ作りにつなげていきます。</p> <p>NGOの強みと大学の強みを相互に生かして、今後も学生の受け入れ、協働した活動、共同研究、共同研究の橋渡しなどで連携していきます。</p>
所属	看護学研究科
氏名	樋口 倫代
専門分野	公衆衛生



草の根技術協力プロジェクトのため予備調査

26-1

第26章 人間関係が健康に与える影響に注目する

世界保健機関（WHO）によれば、健康とは、身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態（ウェルビーイング）のことであり、単に病気や疾患がないということではない、とされています。私もちも同意します。

本書ではこれまで、いかに多くの場面で人的要因^①が健康とウェルビーイングを決定づけているか、ということをお述べてきました。ここで言っている「人的要因」とは、人がどのようにお互いに助け合ったり、傷つけ合ったりするのか、ということです。また、多くの人が病気になる背景に貧困がどのように潜んでいるのかも見てきました。そして第23章と第25章では、世界で起きている飢餓は、人口増加や土地や資源の不足が主な原因ではないことを論じました。飢餓は、不公平な分配一土地、資源、意思決定の権利が公平に与えられていないことに起因しているのです。つまり、こう

健康、それには技術的要因よりも社会的要因が大きく関わります。お互いが自立し、そして対等な立場で、友人のように助け合っていくことで、人は、そして家族、コミュニティ、国もまた、健康を手にすることができるのです。

健康とは、自らの力を信じて進んでいくこと

一人ひとりが、

家族が、

村が、

国が。

発刊予定の「Helping Health Workers Learn」日本語版（サンプル）

SDGs活動紹介

名古屋市子どもに関する総合計画への提案と行政職員との意見交換



担当者	谷口由希子:人間文化研究科(心理教育学科)、准教授、(専門分野)社会福祉学
-----	---------------------------------------

本企画は、名古屋市立大学の学生が、名古屋市の子どもの取り巻く課題について、フィールドワークを通して学び、課題と解決策について考察した結果を発表し、名古屋市子ども青少年局長はじめ、行政職員の方と意見交換を行ったものです。

発表を行った学生11名は、フィールドワークに行く前の事前学習として「なごや子ども・子育てわくわくプラン2015—名古屋市子どもに関する総合計画—」を学び、地域の課題について考察しました。その結果、フィールドワーク先として、1ひとり親家庭・生活困窮世帯の子どもたちへの学習支援事業、2ひとり親家庭の子どもの居場所づくり事業、3母子生活支援施設、4ひとり親家庭の文化スポーツ交流事業を選定しました。学生は、グループに分かれ、複数回にわたり事業実施先の見学を行い、子どもの支援に関わる実務家からお話を伺いました。これらの学びをもとに学生が議論を重ねた結果を名古屋市に発表することは、学生の社会参画の一環としても期待されます。

<提案のポイント>

- 1居場所事業に子ども食堂の機能を加える:手作りご飯の提供、地域巡回バスを利用した送迎の工夫
- 2学習支援事業の対象を小学生まで広げる
- 3ひとり親家庭の支援コミュニティを作る:ひとり親家庭と支援をしたい人のマッチング、ホームステイ



名古屋市大生が子育て支援策 現場視察し市幹部らに提言

名古屋市が改定手続きを進めている「子どもに関する総合計画」に学生の目線や意見を反映してもらおうと、名古屋市立大の学生らが市役所を訪れ、フィールドワークを基に立案した子育て支援策を幹部職員らに提案した。

人文社会学部の自由希子准教授(社会福祉学)の授業を受講する一年生11人が3グループに分かれ、市の支援事業の現場を視察して提案をまとめた。

市が試験導入中で、一人親家庭の小学生を多分から夜まで預かって学習支援や軽食の提供をする「居場所づくり事業」には、市内に増やしてほしいと、食堂と連携を提案。定期的に親同士の食事を聞き、親子双方の悩みを聞ける態勢づくりの必要性を指摘した。

一人親家庭の中学生を対象にした学習支援事業については、対象を小学生まで引き下げたり、支援内容を学習だけでなくピアノや書道などの習いごとにも広げたりすることを提案した。

同計画は、なごや子ども条例に基づいて市が5年間で進める子どもや若者、子育て家庭への支援策の方向針がまとめてあり、2015年度から新たな5年間の計画への改定が進んでいる。

学生から提案を聴き取った市子ども青少年局長の海野繪博局長は「計画の当事者世代である皆さんが現場を直接見て、感じ取った貴重な意見。ぜひ参考にさせていただきます」と話した。(谷口)



Goal 17

17

パートナーシップで
目標を達成しよう



2020年度 国連食糧農業機関（FAO）へのインターンシップ生の派遣



活動の概要	<p>国連食糧農業機関（FAO、本部イタリア・ローマ）は世界の農林水産業の発展と農村開発に取り組む国連の専門機関です。1945年に設立され、196の加盟国（2つの準加盟国含む）およびEU（欧州連合）から成り、食糧安全保障や飢餓撲滅運動等の持続的開発目標（SDGs）の達成を目指しています。本学は2010年にFAOとインターンシップ派遣に関する協定を締結し、2011年度より同機関の水産局にインターン生派遣を開始しました。2018年度より、同機関のインターンシッププログラム見直しにより、インターンの派遣先が全世界のオフィスに拡大されました。</p> <p>2020年度は、学生1名がFAOフィリピン事務所による約3か月間のオンラインインターンシップに参加しました。</p>
活動の時期	<p>2011年度よりインターン生の派遣開始 2018年度よりインターンシッププログラム見直し 2020年度：派遣実績1名</p>
関連URL	<p>国連食糧農業機関(FAO)インターンシップ</p>

2020年度 名古屋市立大学高大連携授業



<p>活動の概要</p>	<p>名古屋市立大学では、高校生が本学学生と一緒に大学の通常の授業を履修できる「高大連携授業」を開講しています。</p> <p>「高大連携授業」は、意欲のある高校生に対し、多様な「学び」の機会を提供し、本学の教育研究に触れ、理解と関心を深めていただくことを目的としています。科目等履修生としてこの科目を受講し、試験に合格した場合、大学の単位を修得することができます。</p> <p>例年、全学部の大学1年生を対象とした教養教育のうち、2科目を開講しています。</p> <p>【2020年度開講科目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■バイオサイエンス入門：総合生命理学部 湯川泰教授、木村幸太郎教授、田上英明准教授 ■琉球・沖縄の歴史・文化を識る：人文社会学部 阪井芳貴教授
<p>活動の時期</p>	<p>2020年度後期（9月～1月）</p>
<p>関連URL</p>	<p>2020年度 開催報告</p>



「バイオサイエンス入門」の様子



「琉球・沖縄の歴史・文化を識る」の様子

SDGs AICHI EXPOでパネルを展示



活動の概要	本学は、2021年2月に開催された日本最大級のSDGs推進フェア「SDGs AICHI EXPO 2020」に、愛知学長懇話会参加大学としてオンライン出展しました。
活動の時期	2021年2月
関連URL	SDGs AICHI EXPO

SDGsギャラリー@東京海上日動でパネルを展示



活動の概要	2021年2月1日～2021年3月31日に名古屋東京海上日動ビルディング1階 東京海上日動ギャラリーで開催された「SDGsギャラリー@東京海上日動」（主催：東京海上日動火災保険株式会社）において、本学の活動をパネル展示しました。
活動の時期	2021年2月～3月

イクボス宣言



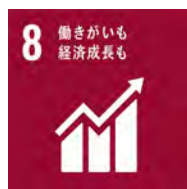
活動の概要	名古屋市立大学では、2020年8月3日(月曜日)に「イクボス宣言」を行いました。 本学では、これまで、ダイバーシティ推進本部を立ち上げて、「ダイバーシティ宣言」を発信して、男女共同参画や次世代育成支援をはじめとしたワーク・ライフ・バランスの推進に取り組んでまいりました。この「イクボス宣言」を契機として、管理職員が自ら率先してワーク・ライフ・バランスの推進に努めるとともに、教職員が育児・介護などの事情を抱えていても、ワーク・ライフ・バランスの取れた働きやすい職場環境をつくることを目指します。
活動の時期	2020年8月3日
関連URL	イクボス宣言

名古屋市立大学男女共同参画奨励賞



活動の概要	名古屋市立大学男女共同参画奨励賞は、公立大学法人名古屋市立大学における男女共同参画宣言の趣旨に鑑み、男女共同参画社会の実現に関連する優れた研究・活動等を行っている本学の教職員および学生等に対して、学長から表彰を行うものです。
活動の時期	2013年以降
関連URL	男女共同参画奨励賞

名古屋市立大学男女共同参画宣言・男女共同参画行動計画



活動の概要	<p>2012年3月16日開催の名古屋市立大学男女共同参画フォーラム「多様性のあるゆたかな社会をめざして一大学で男女共同参画を考える」にて名古屋市立大学男女共同参画宣言を発表しました。</p> <p>また、本学の男女共同参画推進に対する行動計画を定めた「第4次男女共同参画行動計画」を策定し、本計画期間中には、女性上位職の登用推進とワーク・ライフ・バランスの実現に特に力を入れて男女共同参画の推進に取り組んでいます。</p>
活動の時期	<p>【男女共同参画宣言】2012年3月</p> <p>【第4次男女共同参画行動計画】2018年4月1日から2022年3月31日まで（1年延長）</p>
関連URL	<p>男女共同参画宣言・基本方針・行動計画・ポジティブアクション</p>

国費留学優先配置(特別枠)事業「環境健康安全学」プログラム

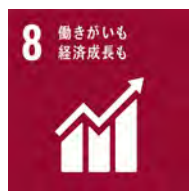


活動の概要	主に東南アジア諸国の①海外拠点校②大学間交流協定校から選抜された国費留学生に加え、本学の医学研究科、薬学研究科、理学研究科に入学した私費留学生と日本人学生が、「環境健康安全学」に関連した教育と研究を協働して行います。このプログラムでは、通常環境健康安全学に関連する講義科目の受講および研究に従事することに加えて、グローバルレベルでのSDGsに関連した課題について議論し解決策を提示するアクティブラーニングやSDGs関連機関でのインターンシップを行うなどの特色があります。
活動の時期	2020年度～2026年度
関連URL	MEXT scholarship 国際交流・留学 名古屋市立大学 (nagoya-cu.ac.jp)
期待される効果、今後の展望	このプログラムで学んだSDGsに関連する知識や経験を元に、プログラム受講生は東南アジア地域等でのSDGs関連のリーダーになることが期待されています。また、このプログラムの履修を通じて培われた人脈は、グローバルレベルでのSDGs課題解決に役立つことも期待されています。
所属	医学研究科、薬学研究科、理学研究科
氏名	高橋智、上島通浩、安井孝周、頭金正博、肥田重明、熊澤慶伯、雨夜徹
専門分野	公衆衛生、環境科学、衛生化学、生態学



一期生アクティブラーニング発表会

都市政策研究センター2020年度シンポジウム「SDGsの達成に向けた都市の役割」を開催



活動の概要	<p>「SDGsの達成に向けた都市の役割」をテーマに開催したシンポジウムを2021年1月18日（月）から24日（日）までYouTubeにて配信しました。国際連合地域開発センターの遠藤和重所長による「SDGsと都市の役割」をテーマとした基調講演に続いて、パネルディスカッションでは経済学研究科の鵜飼宏成教授のコーディネートのもと、芸術工学部卒業生でもある株式会社Rebuilding Center JAPANの東野唯史氏、名古屋市総務局長の中田英雄氏、人間文化研究科の伊藤恭彦教授の3名が、産官学のそれぞれの立場からSDGsの推進に向けて議論を交わしました。受講者からは「SDGs推進の経緯と背景、現状を認識した」などの声が寄せられました。</p> <p>※本件は本学広報誌『創新』Vol.39（2021年3月発行）に掲載されました。</p>
活動の時期	2021年1月
関連URL	名古屋市立大学都市政策研究センター2020年度シンポジウム

保健NGOとの連携



活動の概要	<p>一般社団法人Bridges in Public Health (BiPH) は、知づくり、場づくり、人づくりを通して、科学と社会、専門職と一般の人びと、地域と世界をつないでHealth for AllをめざすNGOです。BiPHを設立し、代表をつとめています。</p> <p>現在は、東ティモールでのJICA草の根技術協力事業の実施、コミュニティ活動のための書籍の翻訳、定期勉強会の開催などが主な活動です。</p> <p>勉強会共催、インターン受け入れ、草の根技術協力事業のカウンターパートとの共同研究など、本学の教育、研究との連携を行っています。</p>
活動の時期	継続中（2022年2月現在）
関連URL	<p>一般社団法人Bridges in Public Health WEBサイト</p> <p>一般社団法人Bridges in Public Health Facebookページ</p>
researchmap URL	https://researchmap.jp/read0145307
関連する論文	- Kyoko Sasaki. Associations between Infant and Young Child Feeding (IYCF) practice and attitudes toward intimate partner violence (IPV) in Timor-Leste. Nagoya: Nagoya City University Graduate School of Nursing (Master thesis); 2022.
期待される効果、今後の展望	<p>JICA草の根技術協力プロジェクトでは、住民の健康ニーズを的確に把握できる人材の育成を実施中です。また、プロジェクトと橋渡しした大学院生の修士論文は、投稿準備中です。</p> <p>Helping Health Workers Learnの翻訳は5月ごろ発刊予定です。保健関係者だけではなく、コミュニティで活動している人びとに活用してもらえるようなしなかけ作りにつなげていきます。</p> <p>NGOの強みと大学の強みを相互に生かして、今後も学生の受け入れ、協働した活動、共同研究、共同研究の橋渡しなどで連携していきます。</p>
所属	看護学研究科
氏名	樋口 倫代
専門分野	公衆衛生



草の根技術協力プロジェクトのため予備調査

26-1

第26章 人間関係が健康に与える影響に注目する

世界保健機関（WHO）によれば、健康とは、身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態（ウェルビーイング）のことであり、単に病気や疾患がないということではない、とされています。私たちも同意します。

本書ではこれまで、いかに多くの場面で人的要因^①が健康とウェルビーイングを決定づけているか、ということ述べてきました。ここで言っている「人的要因」とは、人がどのようにお互いに助け合ったり、傷つけ合ったりするのか、ということです。また、多くの人が病気になる背景に貧困がどのように潜んでいるのかも見てきました。そして第23章と第25章では、世界で起きている飢餓は、人口増加や土地や資源の不足が主な原因ではないことを論じました。飢餓は、不公平な分配一土地、資源、意思決定の権利が公平に与えられていないことに起因しているのです。つまり、こうということです。

健康、それには技術的要因よりも社会的要因が大きく関わります。お互いが自立し、そして対等な立場で、友人のように助け合っていくことで、人は、そして家族、コミュニティ、国もまた、健康を手にすることができるのです。

健康とは、自らの力を信じて進んでいくこと

一人ひとりが、

家族が、

村が、

国が。

発刊予定の「Helping Health Workers Learn」日本語版（サンプル）

本学学生がSDGs IDEA FORUM 2020で最優秀賞、優秀賞を受賞！



活動の概要	SDGs達成に向けた名古屋市の地域課題を大学生のアイデアで解決することを目指して開催された「SDGs IDEA FORUM 2020」において、本学から参加した「NCU グローバル・ジャスティス・プロジェクト」（人文社会学部3年・4年）が最優秀賞を、「Act of New Ring」（人文社会学部1年）が優秀賞を獲得しました。 ※学年は2020年度を受賞当時
活動の時期	2021年2月
関連URL	SDGs IDEA FORUM 2020



最優秀賞

NCU グローバル・ジャスティス・プロジェクト
『デジロウの冒険—プラスチック容器のデポジット新提案』
(人文社会学部3年・4年)
※学年は受賞当時



優秀賞

Act of New Ring
『みんなで作ろう地域の輪～絵本を通して見る世界～』
(人文社会学部1年)
※学年は受賞当時

概要

SDGs

学部学科

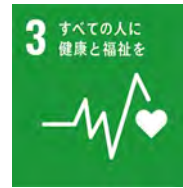
研究科コース

入試

ホーム > SDGs活動紹介 > ようこそ大学へ!プロジェクト—施設等の子どもたちへの学習支援

SDGs活動紹介

ようこそ大学へ!プロジェクト—施設等の子どもたちへの学習支援



担当者

谷口由希子:人間文化研究科(心理教育学科)、准教授、(専門分野)社会福祉学

本プロジェクトは、名古屋市内の児童養護施設などで生活する子どもへの学習支援と進学への動機づけを促すことを目的とするもので、2020年で8回目の開催を迎えます。2013年度から名古屋市の依頼を受け、名古屋市立大学人文社会学部を中心に実施する共同企画です。

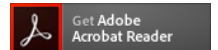
参加する子どもたちは、名古屋市内の児童養護施設や母子生活支援施設で暮らす小中学生約60人です。学生ボランティア(約50名)とともにプログラムを実施します。毎年、名古屋市立大学学長をはじめ、人文社会学部の多くの教職員が参加し、名古屋市からは副市長はじめ、子ども青少年局長、職員も参加します。

当日は、子どもたちと大学生がペアになり、子どもたちは「1日名市大生」になります。午前中は夏休みの宿題を一緒に行い、お昼は学生食堂で一緒にお昼ご飯を食べます。午後のプログラムは、1研究室訪問/教授カフェ(子どもたちがグループごとに研究室を訪問し教員に質問をします)2心理学実験(心理学の実験を体験します)、3大学探検(図書館や大学内の古墳等を学生が案内します)、その他、ダンス、アカベラ、学生講師によるクラフト企画等を提供し、学生生活を体験します。

※児童養護施設とは、なんらかの事情で保護者とともに暮らすことのできない子どもたちが生活している場であり、全国に約600ヶ所、約2万7千人(名古屋市は13ヶ所、約600人)の子どもたちがいます。

[ようこそ大学へ!プロジェクト \(PDF ファイル 0.28MB\)](#)

PDFファイルをご覧になるためには、[AdobeReader®](#) が必要です。パソコンにインストールされていない方は右のアイコンをクリックしてダウンロードしてください。



関連記事一覧